
ヒート&クール

先駆け 足軽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒート&mp;クール

【Nコード】

N2313S

【作者名】

先駆け 足軽

【あらすじ】

この物語はある少年二人が異世界に召喚され、勇者として魔王を倒し元の世界に帰った後の物語。

始まりは二人の少女達との出会いから始まる。

ヒ「またあらすじ変えたのか…」

ク「しょうがないよ、書き直した訳だし」

ヒ「まあ良い、この小説は作者の処女作です」

ク「だから温かく見守って下さい」
ヒ・ク「「それではコメディ―小説ヒート&mp;クールをお楽しみ下さい」」

プロローグ（前書き）

どうも作者の先駆け 足軽です。

修正と言うか内容を読みやすくしました、最初に載せた奴よりは読みやすいと思います。

それでも駄目な所があればぜひ指摘してください。

長くなりましたがこれは作者の初作品です、暖かく見て下さい。

それでは本文をお楽しみ下さい。

プロローグ

異世界のある場所、そこは魔王城そこで戦いが行われていた。

人数は二人、一対一の攻防戦が行われている。

二人の関係は血で血を洗う存在、何故なら二人は勇者と魔王。
。

勇者は振るう、その剣を。

魔王は振るう、その力を。

その死闘は一時間以上続いていた、お互いにボロボロになり互いに確信した次の一撃で勝敗が決まると。

そして互いに力ををかき集め最後の一撃が放たれようとしたその瞬間時空が歪み二人を飲み込んだ。

そしてある異世界の勇者と魔王がその場所から消えた。
。

気が付けば二人は見知らぬ場所にいた、しかもお互いボロボロだった筈なのに傷も魔力も剣や鎧も全て直っている。

「此処は何処？ 私達は城に居たはず」

勇者が口を開く。

「どうやらあの時空の歪みに飲み込まれて異世界に飛ばされたようだ、だが関係無いまず貴様を殺してこの世界を我輩の物してやろう！！」

魔王はそう言うと言分の剣を構えた。

「そんな事差せん！！」

勇者もそう言うと言剣を構える。

また戦闘が始まろうとした、お互い目の前の敵しか見えないようで後ろにいる一人の男に気づかない、気づかないまま戦闘が始まる男には気が付かないまま、この場合二人の集中力が凄いのかもしれない男が気配を絶っているせいなのかわからないが男が動いても二人は気が付かない。

勇者と魔王が剣で切りあいをしていると小さな殺気を感じるが二人は気が付かない。

さっきよりも強い殺気に向けられたが二人は気が付かない。

次に完全な殺気を二人に向けられる、そこで二人は格上の実力者の殺気に気が付き向けられた方向に振り向くが誰も居ない。

「何人ん家の前で殺しあいしてんじゃボケーー ー！！！！」

不意に後ろからそんな声が聴こえた瞬間勇者と魔王は意識を刈り取られた。

こうして異世界の勇者と魔王は出会った、かつて自分達の世界で勇者と呼ばれた一人の男にそしてこの出会いが自分達の呪いを解いてくれる一つの奇跡と運命だと。

「この小説はコメディーだあああああ！！」

男が叫んだがある種の発作だ気にするな。

「この小説はコメディーだあああああ！！」

大事な事なので二度言いました。

プロローグ（後書き）

プロローグについて

再編集してみて感じた事は自分でもひどい、ですかね。

だから内容を大幅に変えました、すこしは名残を残しながらですけど。

後は最後に叫ばしたのはさすがにあれで終わればコメディーじゃないと思ったからです。

今後も修正していきます、それでは次回で会いましょう。

謎の二人組（前書き）

二話を修正と言うより内容を変えました、前回の続きに合わせた為にシリアス成分が高めです。

それでも良ければ本文をお楽しみ下さい。

謎の二人組

「謎の男」

はあ、何だこいつら家に帰って来たら玄関前で殺しあいしてるし殺気を向けても気付かないし本当に何者だこいつら、とりあえず警察に電話するか。

俺はそう決めたが謎の二人が持っていた武器を見て考えを変える、その武器いやその武器についている玉にはとても見覚えが有った。

「宝玉だと…」

不意に声が出たその後に謎の二人に目を向ける、その顔も見覚えが有った。

「アリス：リリィ…」

また不意に声が出た。

しかし何故二人がこの世界に居るんだと考えてしまう。

「とりあえず冷も呼ぶか…」

俺はそう決めると謎の二人を持ち上げ自分の部屋に行く、部屋に着き危険だからガムテープで縛るその後にある男に電話をかける

（しかし何故…）

頭には疑問を浮かびながら。

プルプルと電話の音を聞きながら相手が出るのを待つその間俺は自分達に起きた非現実を思い出す。

俺こと足川^{あしがわ} 軽^{かるい}は電話かけている男佐藤^{さとう} 冷^{れい}に巻き込まれて剣と魔法の異世界に勇者の巻き込まれた一般人として召喚された過去を持つその世界で魔王と呼ばれた一人の女性を倒し狂気の霧と呼ばれる毒霧を消滅させてそして昨日元の世界に帰って来た。

俺達は異世界では一年以上滞在していたのだが元の世界では一日しか経過してなく体も傷だらけだった筈なのに傷痕は全部消えていたしかも異世界で手に入れた力がそのままに置いてきた道具が何故か自分達の部屋有った。

この時点でおかしい一日しかたっていないのはいい傷痕も消えるのも良いだろう力はこの際良いだろう能力だからそのままだこれはわかるしかし何故道具が自分達の部屋の中に有るんだしかもこの世界には使えない魔法が使えるのか手に入れた力は違う筈なのにと数々の疑問が生まれたのが帰って来た昨日の話。

そして今日何故異世界の死んだ女性と置いてきた女性がこの世界に居るのか謎がまた増えた。

(何故?)

俺はそう思うと電話が繋がったそれと同時に頭を切り替えるしかないなんて説明しよう。

「もしもし」

「もしもし、よく冷か」

「何だよ足軽、さっき会ったばかり電話何かして」

「いやゝ実はな…」俺は短めに謎の二人組について話したそして今から俺の家に来てほしいと伝える。

「わかったとりあえず向かう」

「すまん」

「良いから良いからじゃ切るぜ」

「おう、じゃな」

そう言う俺は電話を切った。

（とりあえず冷が来るまで調べるか）

俺はそう決めると二人組の武器を調べたそこでふと気付く俺の知ってる二人とこの二人組が使ってる武器が違う事を。

（他人の空似か？）

俺はそう思うと二人組の顔を見る改めて見ると似てると言うレベルでは無いだが一人は死んだ筈だその可能性は入れておくべきだろう。そう考えるとまた武器を調べる。

<数分後>

大体は武器を調べ終わるとコンコンとノックの音がしたどうやら着いたらしい、俺は声で「開いてる、入ってくれ」と伝えるそうすると「わかった」と冷の声が返ってきた、すこしすると冷が俺の部屋に入ってきた。

「よ、冷」

「よう足軽」

俺達は適当に挨拶を交わす。

「で詳しくは家で話すって言ったけど何だよ、話って？ いやその前にそこでガムテープで縛られてる二人組について聞こう足軽」

「そんな事よりゲームやんね」

「いやいや、一人バシン！！バシン！！いってるぞもう一人は震えてるし！！」

「はははは気にするな」

「いやいやいやいやいや何いつてるんだせめて口のガムテープ外せよ!!」

「で話って言うのは」

「無視か!! 無視か!! あいつらは完全に無視か!!」

「アイツらについて何だが良いか」

「はあくわかったただけどせめて口のガムテープ外せ」

「わかった速く外すぜ!!」

俺はそう言うのと二人組の口のガムテープを外す、とても痛そうだ。

「黒いぞ」

冷が何かいってるけど無視だ、無視。

「外した事だし話すぜ、とりあえずこいつら二人組の武器を調べただけど」

「その前にこいつら誰だ？」

冷が質問してきた俺は家の前で切りあいをしてたから危険だから気絶させて家に入り直ぐにガムテープで縛った事を話した。

「だったら警察に電話しろよ」

「俺も最初はそうしようと思ったんだがこいつらの武器と顔を見て気が代わった訳よ」

俺は冷にそう答えた。

「どうゆう事だ？」

「こいつらの武器に宝玉が有ったからだ」

「本当か!？」

「調べた限り本物だ」

俺はさっき調べた結果を冷に話す、冷は難しい顔をしながら話を聞いていた。

「で顔を見てみる、冷」

俺は二人組の目に張ったガムテープを外し冷に言う

「アリス…リリィ…何故!？」

予想どうり俺と同じ反応だ、とりあえず他人の空似かもしれないと伝える。

「誰か図らないからとりあえずお前呼んだ訳よ冷、でお二人さんお前らは誰だ…」

俺がそう言うと一人が口を開く。

さて何て話が聞けるかな。

謎の二人組（後書き）

前書きと言った通りシリアス成分が高めです、それでもこの小説はコメディーなのですこし足輕にふざけさせました。

たぶんこんな感じが続くと思います。

それでも良ければ次回で会いましょう。

勇者と魔王の今後（前書き）

三話修正と言うか変換完了です。

今回は前回の続きの為に内容を変えました。

今後も内容が変わると思います、それでも良ければお付き合い下さい。

それでは本文をお楽しみ下さい。

勇者と魔王の今後

前回のあらすじ

冷と合流その後に謎の二人組の片割れが口を開く。

（ヒート）

片割れがこう聞いてきた「何故私達の世界の言葉を知ってるのですか！？」っと、やはり異世界人か予想はしてたけど先に質問に答えてもらうか。

「質問に質問で答えるな、お前らは何者だ、もしかしてアルカディア人か」

「…何故わかるお主は異世界人の筈じゃ」
口を開かなかった片割れが質問してきたしかしアルカディア人で有ったか、だが自分達の正体を言っていないから俺が再度同じ質問しようとした時次の言葉で止める

「何故初対面の筈なのに我らの名前も知っておる！！答える異世界人！！」

俺達二人は度肝を抜かれたまさかアリスとリイだったとはしかし疑問が残るこの二人とは初対面では無い筈だ、なのに片割れは初対面と言う、何故だ？俺は疑問が残るまままた二人組に質問をする。

「お前らは何者だ、名前だけで良いから答えてくれ話はそれからだ」
俺がそう言うと二人組は納得はしてないようだが自分達の名前を名

乗った。

「アリス・アルカディアです、第81代目の勇者の称号を持つ者です」

最初に口を開いた女から名乗った。

「リリイじゃ第81代目の魔王じゃ」
次にもう片方の女が名乗る。

そう聞くと俺達はすこし離れて話をする。

第81代目か：この答えで納得が出来たしかし核心が持てないだから俺達二人は名乗る事にした。

「冷俺達も名乗るぞ」

俺は冷に名乗る事を伝える

「わかった、まずは俺から」

冷はそう言うのと二人に向けて名乗る

「俺の名前は佐藤 冷アルカディアの初代勇者だ、称号名は魔術士勇者勇者名はクールだったかな」

続いて俺が名乗る

「俺の名前は足川 軽縮めて足軽アルカディアの2代目勇者だ、称号名は盗賊勇者勇者名はヒートだ」

俺達が名乗り終わると二人は信じられないと言う顔をしていた、やはりな。

「質問するけど第81代目って言ったよね、俺達がアルカディアから消えて何年過ぎたのかな？」

俺が質問すると勇者の子が答えた。

「……千年以上です」

小さな声で答えてくれた。

（しかし千年以上ね〜似てるのと名前が同じなのは偶々かな、まあどうでもいいか別人ってわかった事だし）

俺はそう結論付けると何故自分達の世界に来たのか質問した、話を聞くと自分達は魔王城で戦っていたが原因不明の時空の歪みに飲み込まれてこの世界に来たそうだ、その後は俺が乱入するまで戦って居たそうだ。

また俺達はすこし離れて話をする。

「どうするよ、あの二人の今後は、冷」

「俺達が面倒を見るしか無いだろ、足軽」

「よし頼むぞ、冷」

「何で俺が二人を見ること決定なのお前も面倒見ろや!!」

「良いだろうどうせよくある事だろ、冷」

「だったらリリィをお「しょー」がない面倒見るか」それで良い」

決定したし話すか、俺達は二人の元に向かう。

「今後はどうするつもりだ二人共」

冷が二人に質問する、そう言えば：

「あっ、そう言えば言っただけで名前を知ってるかと言
うと偶々お前らと似てる奴等を知っててな偶々お前らと同じ名前だ
ったわけよ、だから偶然、偶然、でどうする訳今後」

俺達は質問する、今後はどうするか、質問された二人は悩んでるよ
うだ、仕方ない。

「良かったら俺達の家に住まないか」

俺はそう言くと

「一人一人別々にだけどね」

冷がそう付け加える、その答えに二人わ。

「お願いします」

「嫌じゃ」

と言う答えが返ってきた、さて拷……説得するか。

「止めろ!!」

冷に止められた、チィ!!

「冷の頼みだからしないけど何故だリリィ」
とりあえず聞いてみた。

「我は元勇者の寢床に住「隙あり」え……」

俺は話に夢中に成っている時に魔法具『魔封じの首輪』をリリィに着けた。

「な……何じゃこれは!!」

リリィの言葉に俺は答える。

「それは着けてる人の魔力を封じる首輪だ、俺の許可なく外す事は出来ないから、さーこれでお前はただの女の子になった、今後どうするよりリィ」

「ひ、卑怯じゃぞ」

リリィはそう言うのと殴って来たが俺達の知ってる魔族なら魔力⇓力だから全然痛くない、何っーかポカポカパンチみたいな感じだ、とりあえずこれは言っとくか。

「何とでも言うがいいーハハハハハハ」

と言う訳でリリィは俺の家にアリスは冷の家に住むことになった、しかし。

「話が進むの早いなあ」
と一人呟いて見たり

勇者と魔王の今後（後書き）

三話の修正とゆうなの変換完了。

今回の話は前書きにも書いたように前回の続きの為に内容を変えましたが、変な所があれば是非指摘してください、直しますので。

後足軽がリリィに着けた魔封じの首輪はリリィ達が気絶中に予め用意してた者です。

こんな感じで分からない所があればこれも是非指摘してください。

それでは次回で会いましょう。

ヒ「四話目でシリアスか…」ク「だからってタイトルで愚痴るな!!」(前書き

四話変換完了です。

今回は書き方を変えて見ました、読みづらいかもしれない場合は是非言って下さい直しますから。

それでは本文をお楽しみ下さい。

ヒ「四話目でシリアスか…」ク「だからってタイトルで愚痴るな!!」

前回のあらすじ

足軽と冷は勇者と魔王の話を聞いた、そして今後この世界の面倒を見ることした。

（ヒート）

話を聞いた後時間的に遅くなった為に冷達は家に帰って行った。

「出来るだけ速く帰った方が家族の説得に時間を当てる事が出来るから」 っと言う理由らしい。

俺達（足軽とリリイ）は冷達を見送りその後部屋に戻ったりリイの話を聞きたいからだ。

<リビング>

「で我に何を聞きたいのじゃ」

とリビングのソファに座りながらリリイは聴いて来た。

「とりあえず何故お前ら魔族が存在してるのか聞きたい」

と俺は言う、本当なら魔族がアルカディアに存在しない筈魔王なんでもってのほかだなのにこいつは自分は81代目の魔王と言っただから俺はこれを質問した。

「わからん」

俺の質問にリリイはキツパリと答えた、はあ、どうゆう事だ俺が疑問に思っているとりリイは話を続ける。

「我は生まれた時から人と呼ばれる奴等から魔王と呼ばれていた、そして我の回りに集まる奴等を魔族と言っていたのじゃ、はつきり言って何故魔王と呼ばれていたのか我には分からのじゃ」

俺は聞きながら紅茶を入れる、しかし。

「と言うことはお前はただのアルカディア人と言いたい訳か：なら何故世界制服なんか目指してた訳？」

何故だ？

「我は元より世界制服には興味無い、この世界を制服するとお主は聞いたらしいがああ言われれば勇者は戦わないだろうだからそう言ったのじゃ、魔王は勇者に殺される為に存在してるのじゃから」
成る程ねなら。

「何故そんなシステムが有るんだ」

俺はそう言いながら紅茶を出す。

「魔王は狂気の霧と共に表れる、狂気の霧を消滅させるには魔王倒すしか方法は無いじゃろ、我がこの世界に狂気の霧を発生させたくなかっただから我は死を選ぶんじゃないやこれまでの魔王がしてきた用に」
リリイは静かに紅茶を飲みながら言う。

「そうか：だけどお前は死なくて良いぜ」

俺も紅茶のレモンティーを飲みながら答える。

「何故じゃ！？」

「だってお前には汚染された様子が人欠片も無いからだ、それともアイツらが居ない間に殺されると思ってた訳か俺は無駄な殺生はしない主義でね」

俺はそう言いながら紅茶を啜る。

「汚染されて無いとはどうゆう事じゃ我は狂気の霧の中で暮らしてたんじゃないぞ！！」
リリイは怒鳴りながら聞いて来た俺はリリイに質問する。

「な〜何故狂気の霧が狂気の霧と呼ばれるか知ってるのか」

俺の質問にリリイは直ぐには答えられなかった、俺は正解を答える。
「狂気の霧は筋力や魔力を上げる魔の霧だしかし一番の欠点は霧を浴びた人を狂わす霧だ、だから狂気の霧と呼ばれてる、浴びた人を魔族と呼ばれるのは魔力が一番上がるからだ、だが本当の呼び方は狂い人だ」

俺は更に続けて話す。

「狂った奴等はある点が強化される、リリィお前には無いことだ」
そう言いながら紅茶を啜る。

「な、何じゃ…」

俺は紅茶を飲み干しリリィに向けて答える。

「圧倒的な殺戮本能だ、それはとても耐えられない衝動でな本来は
こうやって話す事が出来ない訳だ、なのに魔王であるお前が話が出
来るならお前達魔族は狂い人モドキいや霧を浴びてパワーアップし
ただのアルカディア人と言うわけだ」
俺は紅茶また入れるしかしどうやら分かってないようだな仕方な
い詳しく話すか。

アルカディアと魔族いや狂い人達の戦争

俺達二人が何故勇者として召喚されたのか。

そしてあの二人について。

ヒ「四話目でシリアスか…」ク「だからってタイトルで愚痴るな!!」

（後書き

今回も修正ではなく変換しました。

今回は本来はなかったリリィとの説明回です、なので冷との説明回は少し省くか無くなるかも知れませんが、ご了承ください。

次回はまた説明回です直す前の奴はまた消えるかも知れませんそれでも良ければ次回で会いましょう。

ヒ「そんな感じで話した訳よ」ク「なるほど、とりあえずサブタイで何故会話を

第五話^{ですね}変換完了。

今回は前回のとうりまた説明です。

それでは本文をどうぞお楽しみ下さい。

ヒ「そんな感じで話した訳よ」ク「なるほど、とりあえずサブタイで何故会話す

前回のあらすじ

冷達が帰宅その後足輕はリリイに話を聞いているその後足輕はリリイ達にとって昔話自分達にとって三日前の物語を語りだす。

（ヒート）

「まず、お前に話さないと何故魔王であるお前が狂い人じゃないのかその理由を」

俺は紅茶を啜りながらリリイにそう切り出した。

「理由じゃと？」

リリイは疑問に思いながら返してきた。

「そ、理由が有るんだよだがその前にまずは魔族達との戦争について話さないとな」

「そんなのはいい早く聞かせるのじゃ何故我は死ななくて良いのか！！」

リリイは早く聞きたい用だしかし。

「順序が有るんだよ順序が、お前達が知らない事が、俺が知らない事が有るんだだからまずは俺の話を聞け、ちゃんと答えるから」

俺は落ち着かせる用に

リリイに言う。

「知らない事じゃと？何じゃそれは」

「どうやら聞く気になったようだな、それじゃあまずは何故狂い人達が戦争を出来たのか」

俺は紅茶を一度飲み話す。何故狂い人達が戦争と言う戦略がしつような事が出来たのか。

「簡単な話指導者が居たんだよ指導者が」

俺は長くなるから結論だけを言う。

「指導者？」

リリィは？マークを浮かべるだが。

「説明の前に聞きたい事が有るんだけど良いか」

自分から話を折る事になるが確認しないといけない事が有る。

「……何じゃ」

納得はしてない用だけど同意はしてくれた。

「すまん何分俺も分からん事が有るからさ、で聞きたい事はお前を合わせて五人上級魔族と呼ばれてた奴等は居たか？」

居たなら……。

「確かに我を合わせて五人上級魔族と呼ばれてた奴等は居るぞ」

予想どうり……。

「俺が勇者として呼ばれてた時も魔王を合わせた五人組の上級魔族が居てなそいつらが指導者だったんだ」

「何を言っておる、上級魔族は魔族達の指揮をするのは当たり前じゃろ」

リリイは当たり前用の用に言うだが。

「当たり前じゃないんだよ。千年前の人間が戦った狂い人達にとってな」

考えたら普通じゃない。

「どうゆう意味じゃ」

「狂い人達は殺戮本能しか無いと言ってもいい、はっきり言って戦う方法は殴る蹴るなど武器を使う知識もない勿論作戦を聞く知識もなのに上級魔族は違う」

俺は紅茶を飲み少し間を開ける。

「……………」

「……………」

「リリイ、お前は人間は憎いか…」

俺は不意に問いかけた。けどまあこいつの場合は…。

「分からん」

「だろうな、「？」話を戻すけど上級魔族達の共通点があるそれは人間の時に生まれた憎しみなんだ。憎しみを持った奴等は五人だけ狂気を受けても狂いはしない——でも強化はされるけど——代わりに有る印が現れるその印が狂気を無効化するだけではなく狂い人達を指揮することができる訳だ」

「良くは分からんが我達と同じでは無いと言うことじゃな。しかし狂って無いのなら何故上級魔族は人間と戦争を？」

「言っただろ人間を憎む事が共通点って、簡単な話仕返しがしたかった訳だ。まあ抑えてた奴は居ただけだな。」

最後は声を小さくしながらリリイの質問に答える、どうやら最後は聞こえなかった様だ。

「わかったかりリイ何故狂い人達いやばお前らが争っている理由が分かれば次に入るか。」

「要するに上級魔族達の恨みと狂気の為か」

リリイは神妙な顔をしながら答えるどうやらわかった様だなら次は…。

「次は俺達二人が勇者として呼ばれた理由を話すけどいいか」

「それも関係しておるのか、我にとって…?」

「関係してるよ、キーポイントと言っていい」

とても関係してるとても

「何じゃ?」

「俺達がどうやって呼ばれたかは省くけど理由だけを話す、普通なら俺達一般人が来ても荷物が増えるだけなのに俺達を必要したのか、それは狂気の霧を破壊する事が俺達には出来たからだ」

「それは歴代勇者が得意とした浄化の事か」

「そうか歴代勇者達は出来たのか…俺のオリジナル魔法が」

「待て!?!今俺のオリジナルと言ったな!!どうゆう意味じゃ伝承

では魔術師勇者が作り上げた魔法では無いのか!!」

「どうやら食い違いが有るらしいこの際だ聞いて見るか何処まで事実と違うのか、俺達の勇者伝を。」

「後で説明するからまずはその伝承を聞かせてくれ」

「わかったのじゃ」

そう言うとりリリーの語り出した千年前の俺達の出来事を。

リリーの話をもとめると。

―冷の活躍ばかり。

俺は外道限り尽くしてばかり。

俺達二人が共に旅してたの無し。

共に旅してた二人が居ない。―

これだけかな大まかな違いはとりあえず話を続けるか。

俺は時計を確認するもう8時か余計な事は飛ばすか。

「色々違う所が有るが今日は省くぞ。で俺達は浄化の力で狂気の霧を消滅することに成功した訳だがその後も狂気の霧はモドキだが発生したようだな」

俺は更に続ける。

「俺達が発生元は不明だが根元は絶っただからモドキになったのだろう。どうやら俺達の存在は意味が有った様だ」

更に続ける。

「だからリリーお前は死なくていいんだお前は戦う意味が無いんだから、それに此処は異世界だ誰もお前を責める奴は居ないだからいいんだ……」

俺はそう言うつりリイを頭を撫でるアイツと同じように。

「そんじゃ飯にするか!!」

俺は撫でるのを止め台所に向かう。

「待って!! 何故私に優しくするの!!」

口調が変わって聞いてきた、俺は手をあげて答えた。

「ただ似てたからさ俺の好き人に」

今はこれ位で良いだろう、アイツらの話はまたいつか話すとするか。

ヒ「そんな感じで話した訳よ」ク「なるほど、とりあえずサブタイで何故会話す

今回は旧の奴で説明してなかった奴を紹介しました。ちなみにあの二人は今回は説明しなくて良いと思い省きました、余計かなっと思いでまして。

五話で出てくる聖霊は旧で空気になって居たので今回は出しませんでした、でも必ず出しますし。活躍させるつもりです…出るのは当分先ですけど。

次回は翌日の足軽と冷の会話を書きます、何か修正じゃなくなってますね。

それでも良ければ次回で会いましょう。

ヒ「俺の家がーーーー!!!!」
(前書き)

六話変換完了。

今回はコメディ成分高めです。

足軽に悲劇(笑)が起こります。

作者的には王道だと思います。

それでは本文をお楽しみください。

ヒ「俺の家が――！！！！」

前回のあらすじ

足軽はリリィに自分が知る真実を告げた。

（ヒート）

「と言うわけだ」

「分かるか！！」

「いや、察しろよ何でわざわざサブタイで会話したと思ってる」

「えっ！？ 続いているのか！！」

「サブタイで会話した！！ 今回の会話だろ？」

「な…納得いかねー…」

俺は翌日、冷に昨日の冷達が帰って行った後のリリィとの会話を学校帰りの道で別の学校の冷に合流した後に伝えた。で現状は上の会話になる。

ちなみに俺（足軽）冷の順番だ。

「まあその後は普通に飯食って風呂の入り方を教えて入らせて眠らせただけとお前はとうだったんだよ昨日」

俺達は昨日の後何があったのか俺の家に向かいながら話をしている、先に話したのが俺と言うわけだ。

冷は疲れた様子で答える。

「一言で言うなら疲れた…」

「何でまた、何回かは経験有るって前話してたよな」

俺は氣遣うように冷に言うまあ予想はできるけど。

「俺の姉さんと妹がいつもはしないのに今回だけは何故か反対して

な：しかもアリスが迷惑ならと言って出て行こうとするから引き止めてその後三人も説得するのには骨が折れたよ」

冷はため息をして答えた。

「その後アリスと二人で会話はしたか？」

出来ないと思うけど確認の為に俺は聞いた。

「出来なかった、姉さんか妹が必ず居たから、俺の部屋まで居たときはビックリしたよ」

冷は最後にため息をついた。

「まあ話を聞くために俺の家において来たから話を聞けるだろう、とりあえずご愁傷さま」

俺は劳いの言葉をかけて冷に言う、ちなみに俺の家に居るのは冷が朝早く連れて来たからである。冷曰く。

「あのまま家においていたらケンカ仕掛ないかならしい。」

「なんて会話してたら着いた……ぞ……」

俺は家に着いてまず目にしたのは瓦礫の山及び戦闘している二人の女性……である。

「……………止めるぞ……………」

「何もするなよ!!」

「……………」

「何で無言なんだよ!!」

「……大丈夫だ、悪い奴しか怒らないから……」

「||そいっただけボコボコにするんだろ!!」

「……えっ……」

「違うのか? って顔するな!!」

「……………」

俺はこのままだと被害が拡大しかね無いので止める冷を引きずりながら止めに入る…文字通り冷を引きずりながら。

「走るううなああつうか地面に擦れてるううう!!」
離せば良いのに(笑)

<数分後>

俺は今元建物の瓦礫のリビングと呼ばれていた場所で戦っていた二人…リリィとアリスを正座させている。二人の表情は涙目である何故なら止めに入った俺が武力(拳骨)で止めたからであるタンコブが出来ているのはご愛敬と言うかいきみである。ちなみに冷は二人の攻撃を庇ってくれた、お陰で俺は無傷だ。

「冷、お前の事は忘れない…1ヶ月ほど」

「生きてるは!!! 短いは!!! お前が盾にしたんだろ!!!」

「…チィ…」

「お前今舌打ちしただろ!!」

「サーセン（棒読み）」

「台詞に棒読みが付いてるぞ!!」

いい加減話が続かないので冷には眠ってもらおう。

「と言う訳で沈め!!」

「理不尽!!」

俺は冷に延髄蹴りで眠ってもらおう、さて。

「何故にケンカ―いや殺し会い―してた。理由に寄っちゃわかってるだよな」

俺は怒りいや殺意を向けて二人に聞くこうすれば嘘は吐かないだろう、えっ何で怒りじゃなくて殺意を向けてるかって、イヤ―家を壊されたら殺・し・た・く・な・つ・て・く・る。

「「ヒィィ!!」」

おっといけないいけない余計な殺意を向けてしまった。

「1から10までちゃんとHA☆NA☆SE!!」

余談で有るがこの時足輕の背中には般若がいたそうなの。

<説明と言うなの命乞い中>

「よしするにリリィがアリスに普通に接した事がカチンと来た訳か」と目覚めた冷は言うしかし…

「ふざけんな―!!!!クソ勇者―!!!!」

「嫌！！嫌！！イヤー！！」

「あの世で後悔しろーーーー！！！！」

「落ち着け！！足軽！！アリス！！」

<数分待つて下さい>

俺は冷に止められ仕方なく矛を納めたしかし。

「何で俺が怒ってるか分かるかアリス……」

「なあ……何ですか……（ビクビク）」

「お前が無抵抗の人間に剣を抜いた事だ！！」

「何故ですか！？そいつは魔族なのに！！」

「そう言う事も含めて説明しようとしたのに家を壊した事も怒ってるだよーーーー！！！！」

「そっちが本音だろ！！」

「しかも人避けの魔法まで使って殺す気満々かーーーー！！！！」

「矛全然納めてね！！とりあえず落ち着け足軽！！」
仕方ない。

「冷説明頼むわ……」

「このままだと殺し兼ねない訳ね、理解した」

俺は冷にアリスを任せ俺はリリイの方に向かう。リリイは無事とは言えない布団の上で寝かせているあのクソ勇者のせいで怪我もした――まあ一番のダメージは俺の拳骨なんだけど――軽症で済んだが念には念を睡眠魔法で寝かせ休ませているもちろん回復魔法も使った後

である。

「大丈夫みたいだな」

呼吸は安定してる医療には素人の俺でも大丈夫と判断できる。俺はリリィの布団を掛け直す。

「……………」

「おーい足軽」

どうやら説明は終わったようである、俺は冷の元にいく、さてどこまで信じてるかな。

<リビングと呼ばれていた場所>

どうやらアリスは信じると言うか理解したようだ彼女本人も疑問に思ったようだ、来れについては見逃して野郎だが…

「納得してくれ様ならさっさと直してくれ」

「えっ何をですか」

「家をだ」

「…分かりました」

とアリスは答えると魔法で瓦礫の山を直してゆく彼女は創造魔法を使える様なので大丈夫だろう、さてアリスが家を直す待て唯一無事だった携帯ゲームでも冷と二人でやっとくか。手伝ういやいやこれは罰ですからしませんよしかし。

「オチは無い!!」

ヒ「俺の家がーーーー!!!!」 (後書き)

今回の冒頭の会話は足軽が昨日（前々回から前回）の話をした後の会話です。冷は一樣聞いて居ました。

後次回は旧の時は足軽と冷の紹介なんですけどタイミングが悪いので次回は六話の続きを書きます。紹介はいつかやります。

それでは次回で会いましょう。

アリスの話・ク「童話か!!」 (前書き)

七話変換完了。

今回はアリスの話を聞くとようなの説明会です。

リリィの話と違う部分だけを載せました大体は同じです。

それでは本文をお楽しみください。

アリスの話・ク「童話か!!」

前回のあらすじ

足軽の家大破!!

ただいま修復中。

（ヒート）

あれから一時間、時計の針は7時を向いた頃やっとな俺の家は元に戻った。

その間俺と冷はゲームをして時間を潰したりアリスを急かしたりして時間を潰していた「俺はやってないぞ!!」と誰かが言ってるが気にしない気にしない、で俺達は起床したりリリィを含めて4人でリビングに集まっている。

「リリィの話は冷から聞いただろう、あれは俺達二人からしたら事実だ、しかしお前の話との違いを聞きたい。どう入れ違いしてるのかを何故にまだ人間と魔族が戦争してるのか知りたいだ、人間代表のお前なら深い所まで知ってるだろアリス」

俺は前のソファに座ってるアリスに聞いたちなみに席順は。

足　　○

○二ア

リ二○

○　　○
冷

と言う感じだ。

「足軽さんの話が本当だとしても私は私の代しか知らないですだか

ら私の話ならできます。それで良いなら…」

「もち、それで良いぞ」

そう答えるとアリスは語り始めた。現在のアルカディアについて。

まとめると

魔族は一つの種族と認識されているらしい。

新たな魔王が生まれる間では戦争はしないらしく交流さえしてたらしい。

だが魔王誕生と共に現れる狂気の霧のせいで戦争が始まる。

しかし魔族達は狂っていないらしく人間側についた奴もいるとか。

で人間側は魔族が誕生した後に俺達もやった『勇者の鏡』の儀式をやるらしい。

で勇者に選ばれたのがアリス魔王に選ばれたのがリリイらしい。

どちらかが勝てばそのアルカディアの主権を握れるらしい。

魔王か勇者が死ねば戦争は終わるらしい。

一言言えれば。

「「祭りか!!」」

ヤベ、冷と被ったしかし冷は気にせず続ける。

「誰だ!! そんな解釈した奴は!!」

「お前らただのアホか!!」

「私の生まれる五十年前から決まってお互いの納得いく結果がこれなんですう」

アリスは震えながら言う。ホントにアホか!!

「要するに人間側と魔族側の上層部の奴等のせいか、しかし何故に狂気の霧ののろしが合図なんだ? 発狂しないのに」

俺はアリスの話を聞いて疑問に思った事を聞く。アリスは：

「それは二人の昔話と関係してるんです」

と答えた。その後：

「それじゃ次は俺達のヒート&クールについて話してくれ、どんな話が残っているのか」

冷は言う、とアリスは静かに話始めた。

何でも俺達の名残で勇者は魔王を倒せる唯一の存在と認識されているらしい、そして魔王が現れたら勇者が倒すと言う方程式がなされていて魔族は自分達の新たな王を守るために先に仕掛けると言う答えが出来ていてそれに人間は勇者で立ち向かうと言う答えが出来ている。

「「祭りか!!」」

また被ったしかし何故に：そんな方程式が：とりあえず続きを聞か。

アリスは次に俺達のコンビ名について話し始めた。

ヒート&クール俺達のコンビ名それは俺達が4日前まで使っていたあだ名その名は……………

クールだけ有った。

「またかい!! 何で俺の勇者名残ってないんだよ!!」

「とりあえず落ち着け足軽、話が進まん」

話を戻すと。

だが不自然に残っていたらしい。

「不自然？何故だ」

俺は質問する。

アリスは話を続ける。

「そう不自然なんです。おとぎ話でも書物でも伝承でもそこに滞在してなかった冷さんの存在が有るんです、その時には別の村や町に居た筈なのにまるで二人の勇者が居るかの様に：そこで私はエルフの里に向かいエルフの中で唯一初代の勇者に会った事の人に話を聞いたんです、その人曰く『儂の会った勇者様は別人じゃその人の勇者名はヒート職業は盗賊じゃその人が儂を助けてくれた真の勇者様じゃ』と言ったんですそして次の言葉には驚きと確信を持ちました：『勇者様は二人召喚されたのじゃ』と」

アリスは話を続ける。

「理由は分かりませんが意図的に足軽さんの情報を隠ぺいした人がいるらしいです、けど人の記憶はそう簡単には消えませんが私には足軽さんを知ったんですただどあの人も深くは覚えていないらしく結局勇者は二人居たと言う情報しか収穫はなかったんです。そう言うときアリスはこれだけですと言って話を区切る。

「成る程ね、じゃちよつと質問、冷は一人で旅してたのか？」

「ええ、勇者クールは一人で魔王を倒して見せたらしいです」

とアリスは答える。

「そっかありがとう」

俺はそう言うとき冷に視線を向ける。

(……………)

(……………)

どうやら思い当たる節があるようだ、まあ十中八九あいつだろうだ

が今は時期じゃないだから俺は：

「もう時間も時間だ、冷嫌だと思いが帰ってくれ」

「えーもうちょい居させてくれよ」（泣）」

「文句言うなどうせ早いかな遅いかなただ早い方が良いだろうだから帰れ」

「わかった。それじゃ行こうかアリス」

冷はそう言うのと立ち上がり玄関に向かうアリスは何か納得出来ない様だが冷に続き玄関に向かった。

（……………）

（……………）

リリィも気になっ「何で我だけセリフが無いんじゃない！！」どうでもいいわ！！

アリスの話・ク「童話か!!」(後書き)

今回も説明で終わりました。相変わらずの駄文ですね。

今回は前書きの通りなので飛ばして次回について話します。

まず不振投稿になりますそれはご了承下さい。

で次回なんですが冷の身内の二人を出そうと思います。

あのブラコン姉妹です、この二人は魔法学校編ではモブと化して居たので直すついでに出番を増やすつもりです。

ギャグ要員として。

それでは次回で会いましょう。

悲劇再び…ク「俺の家がーーーー!!」(前書き)

変換完了。

今回は佐藤姉妹(冷の姉と妹)達が登場です、セリフはありませんが。

それでも良ければ本文をお楽しみください。

悲劇再び…ク「俺の家がーーーー!!」

前回のあらすじ

ヒート&p;クールはアリスの話を聞いた、どうやらヒートは何者から存在を隠ぺいされているらしい。

ヒ「理不尽だ…」

（ヒート）

「本当に理不尽だ…」

「お主は何を言っておる？」

「嫌、なんかすごい理不尽だなぁと思ってな、気にするな…」

「？そうか所で我を連れて何処に向かっているんじゃない」

「分かりやすい導入ありがとう。俺達は冷の家に向かっている」

「何故じゃ？」

「それはな…」

俺はリリィに学校の帰り道に起きた話を話す――

<数分前ヒート帰り道>

俺は学校から静かに景色を楽しみながら歩いていた、俺の帰り道は桜の木が咲いている。今は春丁度満開の時期だ俺はこの景色ながめ…

ブーンブーン（携帯バイブ音）

「誰だよ、いい気分だったのに…冷か」

俺はとりあえず電話を出た。

「もしもし、冷か」

「あ、足軽!! 助け、ギャー!!」

プー
プー

「と言う訳だ」

「何故に我を呼ぶ!! 今の説明で我を呼ぶ必要無いじゃろ!! 意味がわからん!!」

「正直な話さ」

「……何じゃ……」

「ツッコミ役が必要だからさ!!」

「帰る!!」

「と言いながらも遅い、着いたぜ冷の家に」

ちなみに今までの会話は移動しながらしました。

リリィは目の前の物を見て言う。

「家なのか？」

何故にリリィが疑問系なのかと言うと目の前に広がる光景は……

瓦礫の山

なので有る、遠くから銃弾の音等が聞こえとりあえず。

「帰るか!!」

「そうじゃな!!」

俺達二人は面倒事の匂いを感じた為元来た道を引き返そうとしたら

……

ドーン！！

近場に何か降ってきた結構デカめのやつが物と言うより……

「冷、大丈夫か……」

人で有る、調べて見るが。

「……………死んでるな……………」

ありがとう冷、君の事は「生きてるわ！！」しぶといゴギブリと認識しとくよ。

「……………結局酷い事を言うの……足軽」

「全くだ、それでも親友か！！」

リリィと冷が何か言ってるが今回は無視だ、さっさと話を進めるか、あつちなみに「余計な事は言わんでいい」ゴギブリが人の思考を防いだが無視だ。とりあえず。

「冷、何が有ったなんか目の前の光景つい最近見た気がするんだけど」

俺は瓦礫の山を見つめながら言う。

「嫌実はな、前アリスと俺の姉と妹がうまくいってないって話したよな」

「読めたぞ、アリスがその姉妹の逆鱗に触れてケンカ↓家崩壊↓飛び火がお前に↓飛ばされ↓今ここな訳か、でアリスは何をやらかった」

「いやな、俺の寝室で昼寝してたようだ。帰って来たら目の前の光景と言う訳だ。止めに入ったら飛ばされ↓今ここ状態な訳よ、意味がわからん」

「……………今俺どんな顔してる……………」

「ものすごくひきつってる」

「まあ関係ないけど鈍感ハシネばいいのになリリィ」

「全くじゃ…はあ…」

「おい何でケンカしてるのか知ってるのかおい!!」

何か言ってる様だが俺とリリィは離れて会話する。

「しかしアイツの性格ならば肉親も落とす事は予想出来るが数日でアリスを落とすとは予想外だなリリィ」

「…………鈍感ハ罪じゃ…………」

なんか無視されたな、まあいい俺達二人は面倒だが冷の元に行く。

「冷とりあえず回りに被害が出るまでにいまだに戦闘音出してる奴ら止めるぞ」

「強さは姉アリス妹の順だ、真美姉が一番優先だ」

「わかったなら姉は俺がアリスは冷が妹がリリィが担当してくれ、それじゃ散れ!!」

俺の合図で俺達は散らばる…………よく考えたら同じ場所に居るから散る意味ないなっと考えながらも……

「うまく行くだろ」

俺はとりあえず冷の姉の方角に向かいながら声に出す。

<数分後>

面倒なので戦闘シーンは

無し!!

とりあえず縄で縛られてる（縛った）三人の特徴を簡単に言おうと。

姉…才色兼備なスーパーウーマンな殺し屋ブラコン生徒会長

勇…チートな恋する勇者

妹…冷兄は私のもの冷兄は…と怖い事を口走るヤンデレアサシン妹
と言う感じだ、ちなみに何故に俺とリリィが佐藤姉妹が殺し屋だと
気付いたのは戦って殺し屋の独特の戦闘だったからである、どうや
ら冷は気付いて無い様だが。

「とりあえずどうするよお前の元家」

とりあえず俺は現実逃避しています、何故かって面倒だからだ。

「さすがに真美姉とカレンの前で魔法が使えないから部屋でも探す
よ…はあ…」

「ならいいアパート有るぜ、アリスとか身分証明無い奴でも住める
場所」

「曰く付きじゃないだろうな」

「選ぶ資格お前に有ると思うか」

「無いな…話は変わるけど「やだ」まだ言っていないだろ!!」

「冗談だよ、良いぜ今日は俺の家に泊まってけ」

と言う訳で今日は俺の家に冷達が泊まる事になった。

しかしその選択が後に悲劇を呼ぶ事を俺はまだ気付いて無かった。

悲劇再び…ク「俺の家がーーーー!!」(後書き)

不振投稿は続きます。

それでも完結はするつもりです。

次回は悲劇がまた起こります。

それでは次回で会いましょう。

悲劇は三度起こると「俺の家がー！ー！！」（前書き）

変換完了。

今回はあの人を出すために再びやりました。

今回でこのパターンは終わらすつもりです。

それでは本文をお楽しみください。

悲劇は三度起こると「俺の家が――!!」

前回のあらすじ

冷の家が壊される。

とりあえず鈍感な罪だね（足軽談）

（ヒート）

あの後（前回）俺達はとりあえず使えそうな荷物を持ち――と言っても使える奴は少なかったが――俺の家に向かっている。

ちなみに縄はほどいて歩いている。

とりあえず家に着いたら荷物を置きその後冷達の通帳（無事だった）から金をおろし日常品等を二組に別れて買いに行くつもりだ。何故二組に別れるかと言うと下着等女性商品を俺と冷が付き合いきれないからで有る下手したら変態扱いされるからな特に俺が。なんて考えていると家に着いた。

「とりあえず荷物をリビングにおいて買い物しに男組と女組に別れますか」

と家に入りながら俺は言う。移動中に説明はしてたので皆直ぐに……別れなかった。

「とりあえず何故にリリイまで別れん」

と俺は疑問を当の本人にぶつける。冷の取り巻き（まだ居ると予想）は分かるが何故に俺から離れん。

「……………!!」

いきなり正気に戻ったのかリリイは離れる、どうやら無意識に腕を組んだようだ（移動中はしてません。近くには居ましたけど）。

「…我は今な…な…何をしてた…」

「こっちが聞きたい別れるかと言った瞬間腕を組んだ来たのはお前

だろ」

しかも痛くはないけど強めに力を入れていたし。

「ほ…本当か!？」

とリリイは驚きながら聞いてきた。

「何故に嘘をつく必要性が有る、つーか覚えて無いのか？」

と俺が問いかけみるとリリイは。

「覚えて無いのじゃ、お主のとりあえずの所までは覚えているのじゃが気が付いたらお…お…お主に腕を…腕を…組んでたんじゃ」

と最後らへんは小さくうつむきながらリリイは答えた、もちろん聞こえてるけど。とりあえず俺はリリイの最後の部分を聞こえなかったふりをする。

「まあ正気に戻ったようだし別にいいけどさ、とりあえず人間綱引きの綱になつて冷を助けるぞ。リリイ」

俺達の会話中に何故に綱引きになったから不明だ。どーせ「別れるなら冷と一緒にいい」となって居るんだろ。実に下らない。

<数分後>

あの後冷を助けだし、冷に俺が教えた台詞を言わせ三人を沈黙化させそして二組に別れてただいま買物中だ。ちなみに女組は服や下着等を買に行かせ俺達男組は皿や箸にスプーンやフォークや調理器具や今日の夕飯の食材や歯ブラシ等の日常品等を買っている。

そして帰り道。

「しかし酷い目に有ったな、冷」

と荷物を持ちながら俺はさっきの事を話題に出す。

「全くだ、俺は綱じゃねーつうの」

と冷はうんざりしながら答えた。

「所で冷一つ聞きたいんだけど…」

「何だよ？」

「お前の家族って職業何？」

俺は遠まわしに冷に聞く。

「何って真美姉とカレンは学生で両親は二人とも海外でサラリーマンしてるけど」

俺は冷に気付かれないようにため息をはく、とりあえず次の質問をするか。

「お前親父に武術習ったりした？」

「確かに剣道は習ってたけど」

どうやらビンゴらしい。何が当たりかと言うと冷の家庭が暗殺者の家庭と言うことだ。まず俺がそう予想したのかと言うと実はアルカディアの時から有る。イヤー普通なら異世界修正で強くなっているのは分かるけどそれでも素人には変わり無い。なのに冷は熟練の剣士と何ら変わらない技術を持っていた。でおいしいなあと思ってたんだけど気にはしてなかったただけど前回にも言ったとうり冷の姉と妹は生粋の殺し屋だった。

そこから導きだすと冷の家庭は暗殺者の家庭だったと言う答えが出た。

しかし冷は気付いて無いようだ、事実冷はアルカディアで人を殺す事に普通にためらいを持っていた。

予想するに姉と妹が隠しているのだろう。

まあいずれ冷は気付くだろう、だってアイツは変わったんだから。と考えていると家に近づいてきた。冷は冗談でこう言う。

「また壊れてたりしてな。お前の家」

「それフラグ」

と俺は笑いながら曲がり角を通るそこからは俺の：

「…家が見える筈だ」

「……うわぁ……」

俺達の目の前の光景はつい最近見た景色だ。戦闘音も聞こえる。

「ハッハハハハハハハハハ」

「足軽が壊れたー！！」

冷がそんな事を言ったが俺はその後の記憶はない。

<夜>

「知らない天井だ…」

気が付いたら俺はベッドで横になっていた。俺はとりあえず起き上がり回りを見渡す、俺が居るのは六畳半の部屋のようにだ。

「はて、何で俺はこの部屋に？」

と疑問に思っていると。

「どうやら起きたようじゃな」

と言う声が聞こえた。

「よーリリイ、何で俺はこの部屋に？」

とりあえず疑問をぶつける、リリイは言いにくそうに言う。

「それはじゃな……」

リリイの話をまとめると…

女組が俺達男組より帰宅し再び冷の事についてケンカしはじめてしまい俺の家崩壊。リリイは三人を止められず（俺に）怒られないように買ってきた衣服を守る事に集中してたようだ。その後は不意に俺の笑い声が聞こえ三人をボコボコしたようだ。その後は糸が切れたように不意に俺は倒れたようで4人をどうするか悩んでいると俺が冷達に教えようとしたアパートの大家さんが来てアパートに移動。現在に至るらしい。

最後に言わせてくれ。

「俺の家が……！！！」

悲劇は三度起こると「俺の家が――!!」(後書き)

今回も喋れない三人：

必ず三人を喋らせるつもりですが先は長そうです。

次回はやっと喋れる？三人そしてあの人が登場！？

不振投稿ですがお付き合いお願いします。

それでは次回で会いましょう。

ついに登場忍さん!!ク「同時上映、足輕不幸に会う」ヒ「俺は某ヒーローじゃ

10話変換完了。

今回はあの人が登場します。

ついに登場忍さん!!ク「同時上映、足軽不幸に会う」ヒ「俺は某ヒーローじゃ

前回のあらすじ

足軽の家再び崩壊、そして舞台はアパートに。

（ヒート）

俺はとりあえずリリイに頼んでコップに水を入れてもらった。

「ほれ、水じゃ」

「ありがとう」

俺はそう言うと一緒に飲み干す、よし落ち着いた。とりあえず体に異常が無いか確認する。

「いててて、所々筋肉痛だな、こりゃ」

「大丈夫か？」

リリイは心配そうに聞く。何か雰囲気の日を追うごとに変わっているみたいだ。

「とりあえず、大丈夫だ。動け無いほどじゃないから」

俺はそう言うベッドから出る。やはり痛いっと思うとリリイが支えてくれた。

「何処に行くつもりじゃ、足軽」

リリイは支えながら聞く。

「とりあえず忍さんの所に行こうかな」

忍とはこのアパートの管理人のことだ。とりあえず部屋を貸して貰えるか聞きに行かないと行けない。

「ならついでに行こう。お主だけじゃ、危なっかししのう」

「頼むわ」

俺は痛みに耐えお願いする、そう言えば。

「ちなみにここ何階？」

「二階じゃが」

俺死んだな。

<数十分後>

あの後俺達は時間をかけて一階の忍さんの部屋の前にいる。

「居るかな、忍さん」

と俺は思いながらノックをしようとしたら。

バーン！！

と言う音と共にドアが開いた。

ちなみに俺を巻き込んでな……。

「いてええええええ！！！！！」

その後俺は痛みで気絶した。

＜さらに数分後＞

「知らない天井だ」

俺は目を覚ますと知らない天井が目に入った。

「お主また同じセリフを言つとるぞ」

と言う言葉が聞こえた、隣にどうやら誰か居るようだ。俺は横に向く。

「よお、
リリイ」

俺は隣に居る人物リリイに話しかける。

「とりあえず聞いていいか、首から下が痛みで動かせないんだけど」

マジで最初の頃より痛い、つーか筋肉痛だけの痛みじゃない。

「まあ気絶するほどの衝撃だったしのう。結構なダメージの筈じゃ。しかし覚えてないのか？」

とリリースは言った覚えているのはドアが目の前迫る瞬間しかって成る程ね。

「理解した。それじゃあここは忍さんの部屋か」

俺が最初に寝ていた部屋とは家具等が違う為そう予想できる。

「そのとうりじゃ、忍と言う奴はしつぷとやらを買いに行ったぞ」
成る程ね、なら。

「冷達わ」

と俺が質問するとリリイはしまったとゆう顔をする。

「安心しろ、どーせこの体じゃ何も出来ん。それに報復はしている
ようだからな」

する気力もないし。

「そうか、ならいいじゃろ。冷は今アリス達を説教中じゃ別の理由
で」

「別の理由とは俺が今この状態と関係してる訳か」

と俺は言う。引っ掛かるかな。

「そのとうりじゃ。何でもあの三人が表に出ようとした時にお主は
被害したようじゃ……あっ」

「この痛みはらさずべきか!!」

本当に殺す!!

くクールく

<足軽が目覚める数分前>

「本当にありがとうございます。忍さん」

俺は足軽が暴走及び気絶した後、部屋貸してくれた人に頭を下げる。

「いいのいいの困った時はお互い様。それに……」

「何ですか？」

俺は言葉貯めた忍さんに聞く。

「足軽君が私のアパートに住んでないから出れないのかと思って不
安だったんだー。タイミング的に足軽君の家が壊れたから正直出る
チャンスかと思ってでしゃばっただけだよー」

「メタい発言は止めてください。忍さん!!」

なんて俺達二人は会話する。

「ねえ冷さん。こっちこっち向いてください」

「そうだよ!! 冷兄こっち向いてよ!!」

「冷、お姉ちゃんの方に向きなさい」

なんて後ろから聞こえる。俺は後ろを振り返らずに言う。

「黙れ!! ギャグ要員!!」

「「ひっ、ひどいー!!」」

そう三人は言うと同時に部屋を飛び出した。

バーン!!

と言う音の後に「いてーーー!!」と言う悲鳴が聞こえた。

「今回は止めないで起きますか」

なんて忍さんは言う。

「そんなじゃ説教してきます」

俺はそう言うと言三人の方に向かう。しかし。

「最近足軽不幸ばっかだな…」

なんて思う訳で。

ついに登場忍さん!!ク「同時上映、足軽不幸に会う」ヒ「俺は某ヒーローじゃ

今回は冷の視点も入れました。どうだったでしょうか。

そしてついに謎の女性忍が登場この人もできるだけ出したいと思ひます。

今回は足軽と忍の会話を軸に書きたいと思ひます。

それでは次回で会いましょう。

ヒ「変わったねって昔の知り合いに言われた」 (前書き)

今回は短くなっております。

それでも良ければお楽しみ下さい。

ヒ「変わったねって昔の知り合いに言われた」

前回のあらすじ

足軽不幸に会う。

ク「大人気上映中だぜ!!」

くヒートく

俺は今横になりながら考えているさてどうしたものやら、とりあえず。

「冷を呼んで来てくれリリィ」

「わかったのじゃだけど余計な事はするんじゃないぞ横になつとくのじゃぞ」

とリリィはそう言うのと部屋から出て行った。

「こんな体じゃ何も出来ねーつうの」

俺は一人になりそんな事を不意に呟いた。しかし。

「魔法が使えないと言うのは不便だな…」

「まるで使う事ができる見たいな言い方だね、足軽君」

と俺の独り言に返事が返ってきた、俺は首だけ横に向き返事をした人に話しかける。

「久しぶりですね忍さん」

「そうだねく何年ぶりかな」

忍さんは笑顔で答えた。

「そうですね、三年ぶりですかね」

俺は思い出しながら答える。

「前に会ったのは四年前じゃなかった?」

「いや三年前ですよ」

俺は忍さんの答えに訂正を入れる、忍さんとは会うのは正しくは四

年ぶりだが一年はアルカディアに居たので忍さんにとっては三年ぶりだ。しかし。

「何で四年ぶりだと思いました？」

何故にわかったのか俺は忍さんに聞く。忍さんはまた笑顔で。

「何となくかな」

と答えた。本当に何を考えているのかわからない人だ。

「それよりも足軽君。体は大丈夫湿布貼ってあげるよ」

忍さんはそう言うと言いつつ痛みで動けない俺に近づき服を脱がし湿布を張り始めた。

「イタッ!!」

「あっ、ごめん足軽君」

「いえ大丈夫ですよ、イテテテ」

「もう少し我慢してねこれで最後だからっ」と

忍さんはそう言うと言いつつ俺に服を着させてくれた。

「いやゝ湿布気持ちゝ」

俺は横になりながら湿布の効果を実感していると不意に…。

「足軽君変わったね」

と忍さんが言った。

「…どこがですか？」

変わったかな…。

「うん、変わったよ何か無理に昔の自分を演じてる感じがする」

「具体的にどこが変わったと思いますか」

俺がそう言うと言いつつ忍さんは少し悩みながら答える。

「まるで本人に頼まれて小さな少女を殺した感じかな」

俺は絶句するしかなかった。

「……………」

「……………」

数分がたったのだろうかそれとも一秒しかたっていないのかわからないが俺は口を開く。

「そんな訳ないじゃないですか」忍さん

忍さんは意味深な笑顔で答える。

「だよね」

「それよりも俺腹減ったすつよ何か飯作ってもらっていいっすか」俺は笑顔で言う。

「わかったよ」卯雜炊作ってくるね」

と忍さんまた笑顔で答える。

その後は忍さんは台所に向かった。

しかし何故忍さんは俺の過去にあった事を――勘か？――当てたしかも俺が無理をしているとまで言った。俺は変わったとまで言った。何故そう言えるのか本当に謎の女性だ、もしかしたらあの人は俺が異世界に行った事に気が付いているのかもしれない。異世界人に会った事が有るのか？疑問が疑問を呼ぶ悪循環と化してきたな。

まあいいか。

もし忍さんが俺の知らない事も知っていてもそれはいずれわかるだろう。今は飯を楽しむに待つか…。

「出来たよ」足軽君」

なんて考えていると飯が出来たようだ、さあ飯だ飯だ。

ヒ「変わったねって昔の知り合いに言われた」 (後書き)

今回はいつもより短くなりました。

長い期間空いたのにすいません。

今回は前回の後書きどおり足軽と忍の回です。

どうでした二人の会話わ？

今回は冷達を出すつもりです、うまく早く出せるよう頑張ります。

それでは次回で会いましょう。

どうやらリリィの様子が…おかしい(前書き)

旧作達を消して一発目の回です。

とりあえず冷が空気です。

それでも良ければお楽しみ下さい。

どうやらリリィの様子が…おかしい

前回のあらすじ

忍さんは何でもお見通し。

くヒートく

俺が食事中に玄関の開く音がした、どうやら二人がやって来たようだ、しかし。

「遅いぞリリィ、冷。」

「すまん遅くなって、説教に夢中になってな」

「コヤツ我が呼んでも気付かなくてのう」

と二人は言うのと俺が横になっている部屋に向かってきた。

「頼まれたのに…」

先に扉を開けて来たのはリリィしかし何故か途中で固まっている、何故だ？

その後に冷が顔を出した。そして一言。

「何やってんだ足軽」

「食事」

俺はキッパリと答える。

「そんなもん見ればわかる何故に忍さんに食べさせてもらってるか聞いているんだ」

「そんなもん決まってるだろ、誰かさんのせいで首から下が痛みで動かせないんだから」

俺は少し怒を入れながら冷の質問に答える。

「す…すいません…」

「お前のせいじゃ無いだろ、家が壊れたのも、怪我をおったのも全てお前が関係してるけど」

グサリ！！

何か変な音がして冷が落ち込み始めたがどーでもいいかどーでも今は…。

「どうしたリリィ」

俺は未だに固まっっているリリィに話しかける。すると石のように固まっていたリリィは…。

「何してるんじゃない!!」

冷と同じ事を言った。俺はその答えに答えようと口を開くが…。

「食事だよ」

忍さんが先に答えたそして続けて。

「そろそろ私はお風呂に入りたいからリリィちゃん代わってくれる?」

と言うと雑炊を入った器と蓮華をリリィに渡す。忍さんはリリィ渡すと直ぐに服を用意して近場の銭湯に向かって行った。残されたのは俺達三人…。

「とりあえずリリィ食わせてくれ」

「ほえ!? わ、わかりました」

何か奇声をリリィは上げたが大人しく俺に食べさせてくれた。

「……………」

「……………」

終始無言だが、俺に食べさせていくうちにリリィは顔を赤くしてきた。

「…………もう良い」

これ以上したら『アイツ』見たいになってしまう。俺の勘がそう告げる

「な、何で!?!」

「普通にお腹いっぱいだから」

俺は案外少食な訳よっと付けたしながら答える。

「なら残りは「お前が食べ」えっ」

「残す訳にはいかないだろ、それに元々それはリリイの分もあわせてるからな」

「だ、けど…」

「俺はもう疲れたから寝る」

俺はリリイか言いたそうな様子だったが無視して眠りについた、まあ狸寝入りだけどな。

こっから先は目をつぶってる為リリイ達の動きはわかりません会話のみです。（作者）

「足軽、足軽ホントに寝たの？」

「すう…すう…（話かけんな）」

「ホントに寝てる…じゃあ…仕方がないよね…べ、別に私は関節…ううう…言えないよ」

「すう…すう…（俺は気にしないけどな関節キス、しかしさっきから口調が変だなこっちが素か？それと冷が空気だなうける）」

「よし！！食べよう！！」

その後に食べる音がした確認した俺は本当に眠りについた

<夢>

「ねえ足軽」

「何だよ？」

「今日はあのスープが飲みたいな」

「またか、お前本当に好きだよなあ。あのスープ。まあ簡単だから助かるけど」

「愛も込めてね」

「わかってるさ」

「うふふふ」

「あははは」

「うんじゃ飯にするか」

「うん!!」

どうやらリリイの様子が…おかしい（後書き）

今回の夢はちよくちよく出てきます。

会話のみですが。

リリイの口調が変なのも理由が有ります。

いずれわかります。

次回は翌日のニュースから始まります、俗に言う布石と言うやつです。

それでは水曜日に会いましょう。

ヒ「魔法学校の話はまだまだ先です」(前書き)

今回は布石のオンパレード？です。

不自然な所もあると思いますがお楽しみ下さい。

ヒ「魔法学校の話はまだまだ先です」

前回のあらすじ

何かリリイの口調が変だ。後冷空気以上

くヒートく

「魔法は存在しました!!」

俺は謎の声と共に目を覚ましたって、はあ!!

「痛い!!」

俺は勢い良く起き上がった為に痛みを感じるだがそのお陰で冷静にも慣れた。俺はさっきの謎の声の発生源の方に向き納得する

「何だ、ただのニュースか：てニュース!!」

大声をあげたため体が痛み出すが関係ない。俺はテレビの前まで移動（できるまで回復した）する。

ニュースにはこう伝えていた。まとめると。

1 異世界につなぐ扉と島が現れた。

2 その島の住人と接触。

3 日本には平和的交渉が行われた。

4 だが何処かのバカが島を占拠しようとした。

5 その時に魔法が使われた。バカ撃沈。

6 そのせいで日本は現代兵器では勝てないと判断した。

7 島側から要求が来た、その内容はこの世界も自分達のお陰で魔法が使える奴らが現れるらしくそいつを自分達の管理したいらしい。

日本及びほとんどの国がその要求を承諾。

8 要求してきた代表は元俺達の世界の住人で何でも今は勇者とか。

何でも異世界に勇者として召喚されたチート野郎らしいもちろんリア充。

「今後の内容は追って知らせます」
と言う言葉と共にニュースは代わった。

（それにしても誰もいないな）

そう思いながら俺は回りを見渡す：決して現実逃避では無い。

（紙が有る、何か書いて有るな、何々）

足軽君へ

アパートとの契約は勝手にしておきました、部屋は昨日の部屋です、私は少し仕事が出来たので出掛けます。

P S リリィちゃん達は居なければ買い物中です。

忍より

（契約は多分冷を通してしたんだろ。それに元々するつもり立ったからいいけど普通駄目でしょ忍…）

俺は紙に書いて有ったものを読み上げて呆れていた、まあ忍さんだししょうがないと無理あり納得して俺はテレビを消し紙の近くに有った鍵を持って部屋の鍵を閉め二階に上がった。

昨日最初に目覚めた部屋を再度確認する。

「……………」

もちろん何も無い。

とりあえず…。

「冷に電話でもするか」

と昨日の被害で無事だった携帯を取りだし冷に電話する。

プルプルプルプルガチャ

「もしもし冷か」

「もしもし何だ足軽」

「いろいろと聞きたいことあるけどとりあえず今何処にいる」

「お前の部屋の家具をリリィと一緒に買い出し中」

「そうかじゃあ魔法が発見されたのは知ってるか？」

「どうゆう事だ！！」

「実はな」

俺は短めにさっきのニュースについて話した。

「と言うわけだ」

「面倒な事になったな足軽」

「全くだ」

「とりあえず家具買ったら直ぐに帰る」

「そうしてくれ、じゃあな」

「じゃあな」

そうして携帯を切った。

（さて、異世界の島について調べますかね）

昨日の被害で無事だったアルカディアの持ち物（持ち歩いてた）からメガネを取り出す。

このメガネは俺のオリジナルの魔道具『目利きのメガネ』と言う物だこのメガネは【知る】の宝玉を使って出来たメガネだ能力は文字通り知ることができる使い方はワードを声に出すだけそうすればレンズ越しに情報が浮かびあがる。

（魔道具の作り方及び宝玉については後日 作者）

何か変な声が聞こえた気がするがまあ良い。ワードは。

「異世界のリア充っと」

【三件ヒットしました】

（何故三件！？）

何故か俺と冷も引っ掛かった何故だ！？

「まあ良い、残りの一件を調べるか」

俺は残りの一件をレンズ越しに触れる（イメージ的に3Dタッチパ
ネル）

調べた結果リア充野郎の情報は。

「名前は天海^{てんか} 勇治^{ゆうじ}この世界では死亡理由は神のミスによるものその神からチート能力をもらい異世界に召喚され勇者となる。その後はハーレムを作りつつ魔王を倒した訳ね」

基本はわかった次は：

「追加キーワード帰還：成る程ね〜神から使命を授かり帰還したわけね。追加キーワード使命：マジか」

俺はリア充野郎の使命について少し驚く、その内容は。

「宝玉使い四名の抹殺及び宝玉の回収か…成る程ね〜追加キーワード実力」

検索結果は俺と冷は一人づつタイマン張っても勝てるようだ、だがリリィとアリスには勝てるまでの実力者らしい…次は

「追加キーワード戦力」

検索結果は今後増幅するつもりらしいと言うのもニュースでやった要求が俺達を倒す為の戦力増加の為のようだ。

「追加キーワード能力」

俺は一番の重要なやつリア充野郎の能力について検索する。

「何々漫画アニメ小説の魔法技を魔力が続く限り使える訳ね、そして魔力はほぼ無限に有るわけね。なんつーかチートだな」

まあ勝てるだろう。と俺は結論付ける。次は島について調べるか。

「新ワールド異世界からの島」

広さは沖縄県より大きめの島が浮いていて世界各地を飛び回ってる

ようだ。中央に建物が建てられている。回りは森。モンスターは迷宮と呼ばれるダンジョンに一樣生息してるようだ。

「島についてはこれぐらいでいいか」

なんて考えているとノックする音がした。どうやら冷達が来たらしい。集めた情報を元に今後どうするか話し合うかな。

なんて思いながら俺は開いている事を冷達に伝えるのだった。

ヒ「魔法学校の話はまだまだ先です」(後書き)

今回はいろいろと説明パートです。

ですがまだまだ魔法学校は先です。

今後は島の動きを少しずつ書きながら日常編を書いて行きます。

今回は冷達と話自分達はどうするか話し合うつもりです。

次回の金曜日に会いましょう。

現状維持及び増える面倒事（前書き）

今回は魔法の存在が広まった為足輕達はどうするか話し合います。

それではお楽しみ下さい。

現状維持及び増える面倒事

前回のあらすじ

謎の異世界が現れリア充チート野郎も現れた。

足軽は情報を集める。

そして出掛けていた冷達が帰ってきた。

（ヒート）

扉が開き三人の人物が何も無い部屋に入ってきた。

「買い物ご苦労さん荷物は邪魔にならない所に置いてくれリリイ、冷…後一人誰だ？」

「アリスです！！」

「そうかギャグ担当か」

誰かと思ったよ。

「何で冷さんが言い始めた事を知ってるんですか！？」

「フ、俺が最初に言ったからだよ」ドヤ。

「ひどいです！？私もシリアスパート入れてくださいよ！！」

アリスが何か言ったが拒否るか。俺はそう結論付け発言しようとしたが。

「わかった」

冷の言葉に挟まれた、まあ良い。

「どうするつもりだ足軽さんよ、お前の事だ調べてるだろ」

冷は続けながら質問してきた。

「まあなとりあえず今わかってる事を話すぞ」

俺は調べた事を三人に答えた。

<数分後>

「とまあ面倒な事になった訳だ」

俺は最後にそう言って話を終わらせた。

「足軽はどうするつもりだ」

「現状維持」

俺はキツパリと答えた。

「何故現状維持なんですか？」

アリスが疑問に思い話して来た。

「巻き込まれたくないから」

またキツパリと答えた。

「しかしそのりあ充野郎じゃたな、そいつらは我達を殺す事が目的なんじゃろ？なのに何故現状維持なのじゃ」

リリイも同じ事を聞いて来た。

「リリイの言う通りだ、何故現状維持なんだ」

冷も同じ事を聞いて来た。まあ。

「すまん説明が足りなかったな、現状維持と言うのはこれまでどうり二人一組で行動及び生活することだ。俺とリリイ、冷とアリスこの二人一組でな。確かにリア充野郎はリリイとアリスには勝てるだろうが俺と冷には勝てないなら俺達（足軽 冷）が二人のボディガードになれば良いだけだろ」

それに：

「一人で襲いに来るとも限らん複数で来るかもしれんだから一人での行動は危険だ。ならペヤお組めば良いだろ」

俺の現状維持の説明に三人は：

「わかった」

冷は納得し。

「わかりました」

アリスも理解し。

「……………」

リリイは返事無しって何故だ!?

「リリイ何か不満か」

最近のリリイは変だ、数日しかたってないけどわかる。

「……………はっ!!わ、わかったのじゃ!!」

一樣リリイもわかってくれたようだ。なら次の話だ。

「話は変わるけど何で異世界の扉と島が現れたと思う? 普通変じゃね世界が繋がるなんて」

俺はふと疑問に思った事を冷達に話す、普通なら…

【ピースが現れました】

パラレルワールド

平行世界の常識

以上

不意にキーワードが頭の中に現れたすると情報が浮かび上がって来た。激痛と共に。

「……………」

おれと冷は静かに耐え。

「痛いのじゃー!ー!」

リリイは声を出し悶え苦しむ。

「……………痛い」

アリスは静かに泣いていた。

<数分後>

「普通いや例外でもあり得ない事のような」

俺達二人はあの後さらに強くなった痛みで気絶したリリイとアリスを各自の部屋に寝かせ部屋に戻りさっき浮かび上がった情報について話している。

「平行世界の常識か：何故こんな知識が急に現れたんだ」

「現れた理由はわかるけどな」

俺はコップに水を入れながら冷に答える。

「お前普通ならあり得ないって思ってたろ」

続けながら冷に質問する。冷は驚ろいている。

「何でわかった！！」

「簡単な話さ俺も思ったからさ」

俺は水を一気飲みし話を続ける。

「まあ気にする所は3つある1つはどうしたら現れるのか2つ何故痛みを感じるのか3つピースと言う単語かな。お前はと思う？」

冷は難しそうに答える。

「最初の二つはわからんが三つ目のピースと言う単語からまだ複数
は有るだろうな」

冷はため息混じりに答える。しかし。

「本当に面倒な事になったな」

俺の言葉に冷は静かに頷くのだった。

現状維持及び増える面倒事（後書き）

今回からピースを出していきたいと思います。

次回はほのぼのした内容にしたいです。

それでは来週の月曜日に会いましょう？

だいたいこんな感じですよ（前書き）

今回は足軽と冷で分けて見ました。

後新キャラ三人出ます。

それではお楽しみ下さい。

だいたいこんな感じです

前回のあらすじ

とりあえず現状維持!!

くヒートく

俺は学校帰り買い物をして帰宅した。

「リリィ」

「なんじゃ」

タツタツと言う音と共にリリィが迎えに来てくれた。

「お帰りなのじゃ、足軽」

リリィはそう言い出迎えてくれた。

「ただいまとりあえず荷物を片付けてくれない」

俺は返事しながらジュースを冷蔵庫に入れながらリリィに頼む。

「わかったのじゃ!! 今日夕飯なんじゃ?」

俺はさらに冷蔵庫にマヨネーズやなどを入れながら「今日の夕飯はオムライスだよ」と答える。

リリィは嬉しそうに「わかったのじゃ」と言うとオムライスに使う食材などを台所に並べた。

俺はリリィに「柔らかめ? 固め? どっちが良い」と質問する。

リリィは迷わず「柔らかめじゃ!!」と答えた。

わかりましたと俺は答えるとオムライスを作り始めた。

<数分後>

俺達はオムライスを食べながらテレビを見ていた。

「美味しいのじゃ」

リリィは嬉しそうに笑顔でオムライスを堪能している。

「そう言ってもらえると嬉しいね」

俺も今回はいろいろと上手くできたオムライスを食べながら返事をする…それにしても…。

「魔法学校ね」

俺はテレビのニュースで流れてるファネジア魔法学校のニュースを見ながらこう出たかと思う。

「そう言えばお主と言った事と違うのう」

リリィもテレビのニュースを見て昨日話した事を思い出したようだ。

「正しくは昨日話してた内容が本当の事だ。さすがに無理矢理連れ込むのは無理だろうと判断して魔法学校を作ったんだろう」

「建前と言うやつじゃ」

リリィは納得したのかその後はオムライスを食べる事に集中し始めた。

「まあどうでも良いか」

俺はそう思い食事を再開した。

くクールく

<放課後>

俺は放課後、ある三人のせいで帰れないでいる。

「と…とりあえず落ち着こう」

「」「落ち着け（ません）（れるか）（わけないでしょ）！！」「」

何故怒っているのかと言うと数分前にさかのぼる。

<数分前>

俺は足軽が作り俺が発動した結界魔法を昨日から発動させている。そのおかげで敵意のある者は家に近づけないようになっていいる。――もちろんファネジアの魔法使いにはわからないようにしている――そのお陰で俺と足軽は学校に行ける余裕が出来たんだが俺は心配で今日は早めに帰ろうとしていたところが…。

「冷様何を急いでいるのですか？」

「そうだ冷何を急いでいる！！」

「私達に言えない事なの冷君」

彼女達に話し掛けてられたのである。

最初に話し掛けて来た子の名前は伊集院 香織

いじゅういんかおり

彼女は家がお金持ちで頭もよく美人と才色兼備な子だ。彼女との出会いは誘拐されそうになった時にたまたま俺が見つけたのがきっかけだ。

次に話し掛けて来た子は狩野 炎夏

かのう

えんか

彼女はキレやすい性格でよくケンカをしている不良娘だ、だけど本当は弱い人を助ける事ができる優しい子だ。

彼女との出会いは彼女がケンカしている時に助けたのが出会い。まさか同じ高校だとは思わなかった。

そして最後に話し掛けて来た子は久遠 歩美

くじょう

あゆみ

彼女は俺の幼馴染みだ。容姿は大和撫子の見本と言う美しい女性だ、性格はツンデレと言った感じ。

彼女との付き合いは生まれた病院からの付き合いらしい覚えてる限りでは幼稚園から同じ学校にいる。

彼女達は何故か俺が女性に話しかけるだけで怒る何故か。

そんな彼女達が居た事を俺は正直忘れていた、そしてアリスの存在が知られたら彼女達は確実に怒るだろう。バレないように帰らればいけない。

「いやゝ今日は早めに帰って勉強しようと思ってさ」
俺は当たり前外れの無い返事をする。

「なら私の屋敷で致しましょう冷様^{わたくし}」
伊集院さんは勉強するなら一緒にしまようと提案してきた。

「いや冷今日は俺と遊べ」
狩野さんはいつも俺と遊びたがる。

「いや冷君は私の家に来なさい引っ越ししたんでしょ」

ビクッ

「な…何の事かな」

「そう言えば家が半壊したそうじゃねえか」

ビクッ!!

「引っ越し先で女と同居してるらしいですわね」

俺はその言葉を聞いた後逃げ出したが捕まり冒頭につまり説教されています

なんか理不尽だく!!

だいたいこんな感じです（後書き）

今回出た三人は冷のハーレム達です。

今回は駄作でしたね、すいません。

次回はまともな奴に仕上げたいです。

次回もこんな感じで日常をかきます。

それでは水曜日に会いましょう。

ヒ「奏でよう」(前書き)

今回は休日です。

少し甘めになっております、苦手な人は飛ばして良いですよ。

それではお楽しみ下さい。

ヒ「奏でよう」

前回のあらすじ

ヒ「なんかきな臭くなってきた、まあどうでも良いか」ク「理不尽だ」

<ある休日>

〜ヒート〜

俺はリリィと共に買い出しに出掛けていた。何の買いに来たと言うと娯楽の為の楽器だ。

元々の発端はリリィがやりたいと数日前から言っていたからだ。つと言っても直ぐ帰る筈もなく「今度な」と誤魔化してたのだからいい加減買ってやろうと俺は思い仏の心で楽器屋に来ている。

ちなみに今はリリィとは別行動で楽器を見ているまあ何か有っても直ぐに駆けつけられる広さなので問題は無い。

「ギターねえ」

ちなみに俺は今はアコースティックギターの前で悩み中だ。

ギター本体は一万円位なのだから他にチューナーなど他の奴も買わないと行けないので悩み中…。

「今月貧しく暮らせば行けるんだけどな」

要は節約したら行けるのだがリリィが気を使うと思うしどうしたものやら…

「おーい足軽〜こっち来てくれなのじゃ」

なんて考えているとリリィからの呼び出しが聞こえた、どうやら決まったようだ。俺はリリィの場所に向かう

<移動後>

「リリィ 決まったか」

俺はリリィが居る場所で声をかけた。

「これが欲しいのじゃ」

つとリリィが指した物は。

「フルートね」

値段は十萬円のフルートとしては安い奴だしかもケース付きだ整備品もついている、これは

「わかった買ってやる」

即買い決定だな。

「良いのか!!」

リリィは断られると思ったのだろう、驚いていた。

「良いの良いのこーゆうのは勢いで買わないといつまでも買えないからさ」

俺はリリィに「持って」つと頼むと歩きレジに歩き始めた。しかし結構高いな〜と思いつながら。

「あ：足軽は買わぬのか」

しかし買わないと決意させた本人がこんな事を言ってきた。

「今日は1日なのに俺のやつまで買ったら厳しいのだから止めとく：まあお前が我慢出来るなら俺のも買えるけどな」

納得しないと思うけどしてほしい。

「が：我慢するのじゃ、だから足軽も買うと良いのじゃしょうがない：」

「じゃあ明日からおかずは単品な」

俺がそう言うとは何故かリリィは嬉しそうに頷く、しかし。

「何故に俺まで買わす」

理由がわからん。

「足軽のギターが聴きたいから」

リリィは笑顔で答えた。

また口調が変わったけど今はわからない、何故変わるのか、まあ良いか。

「わかった、うんじあアコースティックギターの本体と周辺器具取りにいつて来るか」

俺は気にせず歩き始めた。そう言えばアイツも…

その後は楽器を買い家に帰り練習をしてご飯や風呂を済ませて寝た。たまには勢いで買い物も良いなと最後に思い夢の中に消えた。

<夢>

「♪～♪」

「綺麗な歌だね」

「ありがとう」

「俺も歌がうまっかならな」

「足軽は音痴だしね」

「ストレートに言うな凹むだろ」

「じゃあ私が歌うから足軽は楽器を始めたら」

「そうだな」

「足軽は楽器に興味ない？」

「いや、あるよアコースティックギターがやりたいな」

「アコースティック？」

「他の世界の楽器だ、いつか手に入れて上手くなったら聴かせるよ」

「それは楽しみだな」

「いつか必ず聴かせるからよ、楽しみしてくれ」

「じゃあ私はもっともつと歌を上手くなる！！だから」

「「その時は一緒に奏でよう。愛しい人」」

ヒ「奏でよう」(後書き)

今回は足軽達の休日の一コマを描きました。

次回は冷とアリスをメインに書くつもりです。

それでは金曜日で会いましょう。

ク「下着が無い…」（前書き）

今回はコメディーを強くしました。

とりあえず下着買ってこい冷。

ク「下着が無い…」

前回のあらすじ

足軽はアコースティックギターをリリイはフルートを買う、その夜足軽は夢を見た。

<ある休日>

くクールく

俺は今……………

「聞いているんですか冷さん!!」

「そうよ、冷男の子ならさっさと決めなさい」

「冷兄なら私を選んでくれるよね」

「いや私わたくしですよね冷様」

「冷は俺を選ぶよな!!」

「べっ別に私を選んでもダメじゃないんだからね!!」

「」「」「さっ今日一緒に同じ部屋で寝る人を決めな（て下さい）（なさい）（てよね）（なさいまし）（ろ）（てよね）」「」「」「」

面倒な事になっている。

何故このような状況になったのか説明する前に一言言わせてくれ。

「てよねが二人いる!!」

すっきりしたところで何故このような状況になったのか説明します。

<朝>

ピンポーン

俺は寝てたのだがチャイムの音で目を覚ます。

「六時か誰だこんな時間に…」

ピンポーン

俺は時計を確認してる途中でもチャイムは鳴る。

「足軽か…」

ピンポーン

俺は寝ぼけながら玄関に向かう。

ピピピピピピピピピピピピピピピピピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンピンポーン

「うるせー！！近所迷惑だ！！」

俺は怒鳴りながらドアをあける、そこには。

何故か驚いている伊集院さん狩野さん歩美の三人がいた。

「……………」

「「……………」」

俺は静かにドアを閉める。

ガチャン

鍵もしっかり閉めるさて眠りなおそう。

ドゴンー！！

何か後ろからドアがぶっ壊れる音がしたが気にしない、さあ寝おう。

「冷君」

「冷!!」

「冷様」

何か後ろから俺に話しかける声が聞こえる、寝おう今すぐに。

「「遊びに（来たわよ）（来たぜ）（来ましたわ）!!」」

頼むから寝かしてくれ（泣）

<数分待って下さい>

「で何しに来たの三人共」

「あれだ、暇だったからさ…（同居してる奴はどこだ!?!）」

「私は新居の祝いに…（同居してる憎たらしい奴を抹殺に…）」
わたくし

「な、何よ遊びに来たって良いじゃない…（冷君と同居なんて不純よ!!）」

アリス目的か迷惑だ、本当に。
つか上二名は殺す気満々じゃねえか、先手打つか足輕に習ったやつで。

「俺さ…暴力する子嫌いだな…」

「「!!」」

めんどくさい、話帰るか。

「とりあえず飯でも食べるか」

「「嫌!!」」

予想どうり断ったか何故彼女達が嫌がるかと言うと俺は料理が下手だ、正直生のまま食った方が旨いと足軽に言われるほどに――でも足軽のおかげで普通位には改善されただけどな――下手だ。彼女達はそんな料理の餌食なった可哀想な人達だ、だから今回は軽く作れる料理を食べて貰おうと思う。

「別に良いなら俺だけ作るよ」
作ってるの見れば食べたくなるだろう。

その後「冷様がちゃんと包丁を使ってる!!」とか「冷が弱火した!!」とか「冷君が魚を焼いて:」って言って倒れるとか有ったけど気にしない。もちろん一人分だけ作ったけどな!!

朝食の後はいろいろ有ったので省くが夜アリス達が（出掛けてた、買い物らしい）帰って来て食事をし歩美達が泊まると言い出しなら誰が俺と隣で寝るか言い争いになり、冒頭に移る。結果は俺だけ足軽の部屋に泊まる事になった、翌日俺の下着類が無くなったのは言うまでも無い。

「全部持っていくなよ…（泣）」

ク「下着が無い…」（後書き）

今回は朝のくだりが長かったですね…下手ですいません。

次回は足軽と冷の二人の後日談を話させたいです。

それでは月曜日に会いましょう。

魔法学校の序奏（前書き）

今回は最初はコメディー後半シリアスになっております。

それでも良ければお楽しみ下さい。

魔法学校の序奏

前回のあらすじ

時間が時間が無かったんだ…（作者）

ク「だからってあそこまで駄作にするなよ！！」

（ヒート）

<足軽・リリイの部屋>

「前回伊集院狩野歩美達が六時から遊びに来た、その後の夜までは省かれ夜に女六人に俺と一緒に寝るか言い争いになり激論の末俺は足軽の部屋に泊まる、翌日下着が盗まれた以上」

「作者がちゃんとあらすじ書いて無いからって自分で言うなよ冷」
本当にいきなり部屋に上がりこんで第一声は何言い出すんだよ。

「そして前回矛盾している所が有ったぞ、そう何故俺はアリスを出掛けさせたんだ！！」

こいつさっきから作者に問いただしてるな。

「いやその時は俺とリリイがつけてたし」

そう昨日俺達はあの三人（アリス 佐藤姉妹）をつけていた。冷が居ないのは寝てたし家に居ないのはまずいと思ったからだ。

「後付けですわかります」

何か今日の冷壊れてるな… 殴って正氣に戻すか、その前にアコギを置いて。

「最後に「いい加減メタい発言は止めろ！！」ゴフツ！！」
結構強めに俺は殴ってしまった、反省反省。

「と言いながらも殴るな！！」

読心術でも使えるのかこいつ!!

「いや!! さっきから口に出てる!! 後殴るの止めてくれ!!」
いい加減止めるか…。

「まあわざとなんだけどな」

「どっちだ殴り続けた事か!! 口に出した事か!!」
それはもちろん。

「両方に決まってるだろ」
俺は笑顔で答える。

「こいつ死ねばいいのになって目だな、ほめるな」

「ほめてねーよ!!」

その後冷は深く深呼吸しながら落ち着き始めた。

「で何のようだ訳」

俺はアコースティックギターのコードを押しながらポロンポロンと鳴らしながら聞く、上手く押さえきれてないな、自分で言うのとあれだけ。

「ファネジアについてだ」

ベーン♪

今度は上手くできたかしねえ。

「現状維持。だけど何故話題に出したのか理由を聞こう」
前に話して理解したと思ったんだが何故今になって聞くかねえ。

「魔法学校の生徒達を助けないんだ」

あれか、ここまで嗅ぎ付けたかしかし俺は知らんふりして聞く。

「何故だ？」

予想してたのか冷は続ける

「集められた生徒達は殺しをいずれ強制させられる：俺はそれが嫌なんだ」

もちろんそれは近い未来だろう、でもまあ…。

「関係無いだろ」

俺はしれっと答える、本当に関係ない。

「関係あるだろ！！俺達なら止められる！！」

「そしてリリィとアリス達を危険に晒すのか？俺は嫌だね」

俺はそれがまたしれっと答える。

「確かに関われば危険だ、それでも…それでも…」

冷は悩み言葉が見つからないようだ、しょうがない。

「確かに関われば危険だ、だが親友の頼みなら勇者様（笑）の相手も異世界の相手もしてやろうじゃないか」

何でこんな恥ずかしいセリフを言わなければいけないのか。はあゝ。

「頼む足軽俺と一緒に英雄になってくれ！！」

「わかった、熱き英雄になってやろうお前は冷たき英雄な」

俺は普段の様子なら言わないセリフを言った瞬間。

【ピースが現れました】

ヒーロー
でんせつ
英雄達の記憶

以上

ピースが現れた、前回の出現よりも激しい痛みと共に。

俺達はなんとか耐え新しい記憶を探る。

「前にもこんな事があったのか」

冷は懐かしそうに言う。

「そうだな、まあ昔話に花を咲かすのは後だ。今すぐに下にいるリイ達と話すぞ」

「わかった」

冷はそう言うと言関の方に向かうそこで俺は呼び止め言う。

「一つだけわかった事があるぞどうやら俺達は記憶が封印されているようだそしてその記憶が全ての鍵だ」

「ファネジアもか」

冷は振り向き聞く。

「おそらく」

俺はそれだけを言うと言を追い抜き下に向かった。

俺だってわからん事があるからな。

そんな事考えながら。

魔法学校の序奏（後書き）

今回は足軽と冷の会話のみでした、正直書きやすかったです。

後二話位で魔法学校に行かせたいと思います。

次回はファネジアにどうやって殴り混むか話合います。

それでは水曜日に会いましょう。

ヒ「魔法学校までもう少し」(前書き)

今回は導入回です。

いろいろと変な所もありますがお楽しみ下さい。

ヒ「魔法学校までもう少し」

前回のあらすじ

冒頭で冷が暴走足軽がツツコミに回る。

その後落ち着きを取り戻した冷が魔法学校の生徒達を助けたいと持ちかける足軽はその頼みを受け入れる。

<一階アリス・佐藤家族の部屋>

〜ヒート〜

俺は先に冷の部屋についたのだが…。

「これは私のです〜!!」

「渡しなさい〜!!」

「二人共離してよ〜!!」

「お主らなにを下着を取り合っているのじゃ!!」

ボタン…

俺は静かに扉を閉めた…よし俺は何も見えない!!

「何してる? 扉の目の前で」

お前のせいで部屋が混沌カオスになってると言いかけたが押し込み、答える。

「俺にはこの部屋に入る勇氣は無いだけだ」

「何言ってる？」

そう言うのと冷は扉を開けた。多分だけど…これで大丈夫。

扉を開けた先には平然と話すアリス・佐藤姉妹達と困惑するリリイが居た、さすがにあれは見せられないと思ったのだろう…なんて考えていると冷がアリスとリリイを呼んだ。アリスは嬉しそうにリリイはげんやりしながらそのまま上に行くと例が伝え俺達は上に向かった。俺は何も見えてない…そう呪ってやると言う視線を佐藤姉妹が俺に向けてきた事なんて…俺は何も見えてない。

＜二階足軽・リリイの部屋＞

「と言うわけだ」

俺は前回の事を短めに二人に話した。つか。

「今回のあらすじ物凄くまともだな」

「前회가前回だけにまともに見えるなって今言うことか」
呆れながらも冷は答えた。

「ま、と言うわけで魔法学校に入る事になったわけよ質問ある人手挙げて」

俺がそう言うのと三人手を挙げた…って

「何で冷まで挙げた？やろうって言ったのお前だろ」

冷は疑問ですつと言う顔で答える。

「いや、リリイ達も学校に入れるわけ？」

確かに疑問に思うだろう。

「それはそうだ俺達の側に居た方が一番安全だ」

次質問ある人つと言うとアリスが質問してきた。

「私の身分証明書はどうするですか？」

あー言っただけで無かったなっと思いだしながら俺は有るもの取り出す。

「はい、二人の身分証明書」

二人は驚きながら受け取る。

「もちろん偽造だけだな、もちろん普通に使えるやつだから安心しろ」

質問する前に言っておく冷が「いつの間に作った」とため息ながら答えるが「秘密だ」と答えとく。最後に質問ある人とリリィに聞く。

「我のこの首輪は外せないのか？」

「外せないけど」

リリィは「何故じゃ!？」と言う、それまー普通にバレるからだけどと答える、あっちなみに普通の人には首輪は見えませんかから恥ずかしいですよ。

「誰に説明してる誰に」

冷が何か言ってるけど無視。

「まあ諦めてくれ」

何故じゃーと呻きながらも落ち込み始めた、しょうがない今日はリリィの好きなやつでも夕飯にするかと物で機嫌を治す事にした、なんつーかあれだな。

「汚い」

と冷とシンクロした、思考また読みやがったな、まあ良いか。俺は今後の予定を三人に告げる。

「丁度今週位に魔力検査つー魔力が有るかどうかが調べるやつがこの町に来るそれでSランクAランクBランクCランクEランクある中の最高ランクのSランクに冷とアリスがなってくれ二人の魔力なら余裕でなれるだろう。俺とリリィは最低ランクのEランクになるから、あっちなみにランクによってクラスが決まるからな」

俺がそう答えると冷が質問してきた

「何故お前達はEランクなんだ？」

冷の質問に俺は…

「お前達見たいに目立ちたくないし、それに今のリリィならギリギリEランクだからだ、ボディーガードはできるだけ近い方が良いでしょう」

「成る程ね、わかった」

何かわかってないような気がするがまあ良い。

「それまで現状維持わかったな」

ヒ「魔法学校までもう少し」(後書き)

今回は足軽達が魔法学校に潜入するためにリリィ達に説明及びどう潜入するか話あいました。

次回はどんな感じになるかは未定です。

ですが必ず金曜日に更新します。

それでは金曜日に会いましょう。

新たなる武器（前書き）

今回は前回登場した魔力検査を軸に進みます。

それではお楽しみ下さい。

新たなる武器

前回のあらすじ

足軽達は魔法学校に乗り混むための話し合いをした。

<某日某所>

話し合いから数日がたった。

今日は休日なのだが俺とリリィは学校にいる、学校関係者以外の他の人達もいる。

確認したら冷の学校も一般人等が集まっているらしい。

場所が違えど目的は同じ魔力検査をするためだ、何故か数日の間に義務になったやつだ。

ここで検査方法を説明する、魔法でできたアクセサリ型の魔法具（俺のアルカディアの道具は魔道具）を出現させる事が出来れば魔力が有るとなる。ランクはその魔法具の質により決まるらしい、例えば素材とか装飾とか。そしてこの魔法具はランクに関わらず二つの機能がついている。

一つはアイテムボックスと呼ばれる異空間に物を収納出来ること。

二つは武器の出現、これは魔力の質や量により強さが変わる。

その他にも魔力の性質などや量に属性や特殊能力等が追加されるらしい。

けどまあEランク狙いの俺は属性や特殊能力なんて無いだろう。

なんて考えていると先にやって居たりリィが出てきた。

「どうだった」

俺はリリィに話かける結果は予想出来るけど。

「お主の言う通りEじゃた、納得出来んのじゃ…」

とリリィはため息をする。

「まあ気にすんな、お前は俺が守るから」

と撫でながら答える。

「な、撫でるでない!!」

何故か顔が赤い、まあどっかの野郎じゃないからわかるけど。

なんてリリィを弄っていると「次の方入って下さい」と言う声が聞こえたどうやら俺の番らしい。

「うんじゃ、言ってくる」

余裕だろうなんて考えながら俺はテント（でやってた）の中に入る途中で聞こえた「一人にしないでよ」と言う言葉に俺はもちろんと腕を挙げて答えた。

<テントの中>

テントに入ると目の前にフラッシュがかけられたような光が現れた。目が機能するまで数秒かったが目がなれるとそこは…。

「神殿か…」

どうやらあの光は空間移動系の魔法だったのだろう、少なくともテントと神殿のデカさが違う。

「あっ!!! 足軽!!!」

なんて考えていると聞いた事の有る声に話かけられた。

「よう冷」

とりあえず挨拶。

「よう、足軽。しかし凄いな違う所に居たのに同じ場所に居るなん

て」

冷はすでにどんな魔法を使ったのわかってる癖にさも初体験のように話かけてきた。

「本当に凄いな魔法って」

俺も合わせる。

「とりあえず移動しよう」

俺達は移動し始めた。

ここで何故俺達があんな会話をしたかと言うと事前に調べた事で神殿に移動させられると知った時もしかしたら知り合いに鉢合わせするかも知れないのでボロが出ないように注意する事にした、ちなみに冷に出会うのは予想外の出来事だ。

<神殿の中>

神殿にはたくさんの方が居た皆順番をまっているようだ。

「どうするよ足軽」

されはもちろん。

「おんなじグループになるまで待つしかないだろ」

「だよな」

まあ諦めろ。そう言えば。

「リリィは終わっていたけどアリスの結果わ？」

「Sランク」

成る程ね、ここまでは順調か…。

「次の方入って下さい」

どうやら順番が思ったより早く回って来たようだ。

「そんじゃ行くか」

「おう」

神殿のさらに奥に俺達は入った、そこは光の届かない地下室だが有るものが光を発しているため暗くはない、その有るものとは：

「この魔方陣の原理わかったか魔術師勇者」
魔方陣。

「どうやら一種の召喚魔法の一つのようだ」

俺達は回りに気付かれないように会話する。

「次の方どうぞ魔方陣の中に」

どうやら最初は冷の番のようだ。

「そんじゃ行ってくる」

冷はそう言うど魔方陣の中心に向かう。

「良いですか私の言葉の蹟に続いて下さい」

係員が冷に説明する。

「わかりました」

「それでは行きますよ【我が相応しき装備をここに】続けて下さい」

「【我が相応しき装備をここに】」

冷は続けて言う、全力で魔力を注ぎながら。とりあえず腕で目隠しするか。

俺が目を保護した瞬間に強力な光が発生した目隠ししてもわかる程だ。

光は数分続き少しずつ消えていった。

そして冷の右腕にはブレスレットがはめられていた。終わりのようだ。

回りの人（係員及び他の参加者）は目を押さえているまああんだけ強かつ光を直視したら痛いだろう。

とりあえず他の係員を呼び冷のブレスレットのランクを測ってもらった。

予想どうりSランクだった次に武器を出現させようと冷はしたが魔

法学校に入るまでは出すのは禁止らしく何の武器かわからずじまいで冷は先に帰って行った。

他の人が行動不能のために次は俺の番になった。

俺は魔力を込めなくて呪文を唱えた。

そうすると微量の光が魔方陣から現れた気がつく。と右薬指にシルバ―の指輪が現れていた。ランクはE、やる事やったし出るか。

<足軽・リリィの部屋>

あの後俺達は俺の部屋に集まって有る事を確かめようとしていた。

「情報隔離完了いつでも良いぞ」

俺はバレないように細工をする、俺達がしようとしている事は。

「――【【出でよ我が牙よ】】――」

「出ろ」

武器の出現だ。

呪文を唱えると各自に武器が現れた。

冷は回^{リボルバー}転式拳銃

リリィはグロ^{ロング}ープ

アリスは長^{ロング}剣

そして俺は刀が現れた。ちなみに俺は呪文破棄で出現させた。

各々は自分の新しい武器を各自にし始めた。

武器も確認したことだしどうやら明日から魔法学校に転入する事になるだろう。今日は各自に休むように伝える。しかし

「何故に戦力をここまでは早く増やすつもりだ」

俺の言葉は夕焼けと共に消えていった。

新たなる武器（後書き）

今回で日常編は一時休憩です。

次回からは魔法学校編です。

魔法具をブレスレット縛りからアクセサリに広めたりいろいろと変更してみました。読みやすくなっていればさいあいです。

それでは月曜日に会いましょう。

魔法学校：足輕の朝（前書き）

今回はシリアスパートです。

それでもよければお楽しみ下さい。

魔法学校…足輕の朝

前回のあらすじ

魔力検査終了及び新たな武器入手。

<魔法学校>

（ヒート）

魔力検査から翌日俺は目覚めたら魔法学校の寮にいた（調べて良かったと思う）。

多分空間系の魔法で移動させたのだろう、しかし…

「あれ持つてくるの忘れたな」

あれとはアルカディアの持ち物の事で有る。まあ魔法を使えば直ぐに取り出せるのだがな。それよりも今は現状確認だ。

俺は回りを見渡し有る物を発見する。

「机の上に紙ね…」

正直ベタだ、そんな事を考えながら俺は紙に書いてあるこれからどうすれば良いのかを確認する。

「クロゼットに制服が有るので着て下さいか」

俺はクロゼットの中身を確認するそこには学ランがあった、これが制服ねえ。

「次にこの紙に書いてある場所に向かって下さいか」

最後の3ページ目に地図が載っていた。目的地は職員室のようだ。

「その後は担任に聞くようにねえ…」

とりあえず俺は学ランを着てこの自分に当てられた部屋から出る、時間は8時までにつくようにと書いてあったが今は7時なので他の三人と合流するつもりだ、幸いリリィの気配は直ぐ近くを感じるの
で先ずはリリィと合流するか。

<足軽移動中>

さてリリィに近づいてきたのだが何故か三人ほど知らん雑魚が近くにいる、何してるだか。俺は曲がり角を曲がりそしてリリィを確認する。そこには三人がかりで押さえつけられているリリィの姿があった。

「偽りの仮面をここに」

俺は有る物を魔法で取り出す、俺はそれを付け雑魚三人の男達に話かける。

「何してる」

そこで男達は俺の存在を認識するおぼろげだな。

「誰だてめえ!!」

お決まりのセリフを吐く見た目騎士の男。

「そいつの連れだ」

言葉短く俺は語る。

次に口を開いたのは見た目魔法使いの男。

「いや落ち着け相手は最低ランクだ」

次に見た目盗賊の男が笑いながら言ってきた。

「ハハハハハ、連れか、ならお前はさっさと他の所に行きなこいつは今から俺達と遊ぶんだよ」

盗賊男がそう言うのと雑魚三人笑い出した。本当に雑魚だな相手の実力もわからないなんて。

「何が可笑しい」

理由はわかるが知らんふりをして聞く。

「まさかお前転校生か」

騎士男は確認して来た、他の二人は笑いこらえてる。

「そうだが」

俺が答えると雑魚三人はさらに笑い出した。

「そうか、ぷぷっ、なら説明してやるよ迷宮に入る事が許されたSランク様だ、これでわかるよな？」

騎士男は意味不明な事を言ってきた。

「意味がわからん」

俺がそう返すとさらに笑い出した雑魚。

「それじゃ無能君に説明してあげる俺達はお前より魔力が上さらに実戦経験もあるお前みたいなEランクの転校生がどう足掻いても敵わないの。だからせいぜいお前たちEランクは俺達に媚びてればいいだよ!!」

そろそろこいつらと口を聞くのも嫌になってきたし倒すか。

「そうかなら試して見るか雑魚ども」

俺がそう言うのと雑魚三人はさらに笑い出した。

「面白れーならやって:!!」

騎士男に俺は蹴りを入れる貧相な鎧はへこみ腹にダメージを与える。騎士男が何か言って居たがこんな奴等の言ってる事なんてたかが知れてる。

「えっ:」

俺は更に隣に居た魔法使いの男の首に回し蹴りで沈める。次に盗賊男の顔にアイアンクローをする。

「なあー俺達Eランクはどう足掻いても敵わない筈だよな、なのに お前達は何故負けている？」

俺は盗賊男をアイアンクローしたまま上に持ち上げる。

「離せ!! 離せ!!」

更に力を込めて言う。

「お前達は実戦経験が有るんだろなら:」
少しだけ力を緩め言う。

「死ぬ覚悟は出来てるよな」

最後に遺言を聞くか。

「ご、ごめんなさい!! ごめんなさい!! 殺さないで!! 殺さない

で!!」

そんじゃ

「遺言はそれで良いな、それじゃ
殺そうとしたが…」

「止めるのじゃ!!」

リリィに止められた。ハァー。

俺は盗賊男を地面に叩きつける。ハァー。

「良いのかリリィどの世界でもグズはグズだぞ」

「良いのじゃお主が手を出す程の相手ではないのじゃ」

被害者本人がそう言うなら仕方ないけど、まあ脅しとくか。

俺はまだ気絶してない（騎士男と魔法使いの男は即気絶した）盗賊
男の髪をつかみ顔（仮面付けてるけど）を見るようにする。

「もしも次こんな事したら殺すから、わかったか雑魚」

そして盗賊男の顔を地面に叩きつける、こんぐらいで良いだろう。

「そんじゃリリィ職員室に行こうぜ」

「冷とアリスと合流しないのか？」

「二人ならすでに職員室に居るからそこで合流しよう」

行くぞ、俺はそう言うとりリィの手を繋ぎながら歩き出した。

今度は離れないように…そう思いながら。

魔法学校：足輕の朝（後書き）

今回は足輕の戦闘を試しに書いてみました。

短くてすみません。

今回の足輕は魔法を一切使わず雑魚三人を沈めました。そして雑魚三人はリリィと足輕の顔などの情報を覚えてません。唯一覚えているのは恐怖のみです。

何故覚えていないと言うと足輕が取り出した仮面の能力のおかげです。

どんな能力から後日。

次回は冷の朝を書こうと思います。それでは次回で会いましょう。

魔法学校：冷の朝（前書き）

今回は冷の回です。

今回はいつもと増して駄作です。

それでもよければお楽しみ下さい。

魔法学校…冷の朝

前回のあらすじ

足軽が目を覚ます知らない寢床に居た、足軽は事前に調べていたの
でここは魔法学校の寮と判断した。その後はテーブルに置かれてる
紙に従い制服を着るその後は他の奴等と合流するため移動。最初に
見つけたリリィが襲われていたもので足軽は雑魚三人を沈める、そ
の後は二人は職員室に向かった。

<学生寮Sランク>

くクールく

「知らない天井だ」

っーか…。

「あらすじ長くね」

俺はそう呟きながらベッドから起き上がる。

「確か俺は自分の寝室で寝てたはずだ？」

俺は寝ぼけているのかうまく思考が回らない。

「とりあえず何か飲むか…」

水道ぐらい有るだろう。なんて考えていると。

「どうぞ、ライム水です」

コップを渡された。

「ありがとうございます」

俺はコップ入った水、ライム水を一気に飲む。

「かゝ旨い」

程かな酸味が脳を活性化させるそのお陰で気付く。

「誰!?!」

知らん人がいる!!

「私は今日から冷様の専属メイドのコールです、以後よろしく願います」

そのメイドさんはそう言うときスカートつまみお辞儀した。

「ちょっと待ってね整理するから」

俺はメイドさんにそう言うとき昨日足輕に教えてもらった事を思い出す。

——会話のみ——

「そう言えばお前たちに注意事項がある」

「何だ、足輕」

「アリス、冷お前たちには専属の従者がつくぜ」

「何故ですか？」

「それはだなアリス、いやば監視及び支配の為だ」

「監視はわかるが支配はSランクだけか」

「Sランクだけだ、何故かと言うときSランクは一番の戦力だ、だから管理しやすいように従者がつく。正直他のランクは眼中にないよ
うだ」

「よくわからんが要するに俺とアリスには従者がつくわけな」

「監視及び支配のためな」

「きよつける事は何かあるか？」

「出来るだけ出された食べ物や飲み物は飲まないような確実に毒か何かあるはずだ」

「わかった」

「念には念をこれを飲んでおけ」

「これは何ですか？」

「俺特製の薬だ、これを飲めば万が一の時も大丈夫だ、飲んでくれ。後…」

「「わかった（りました）」」

「それじゃおやすみ」

なんて言ってたな…早速飲んだよ…だけど体に異常は無いな。次にすることは…。

「コールさん」

コールさんは驚いた顔をしている、この反応からして何か盛ってたな。

「俺の目を見てください」

俺はコールさんの目を覗きながら唱える

「【魅惑】^{チャーム}」

俺が魔法を発動させるとコールさんは俺に見とれていた。

【魅惑^{チャーム}】は人を魅惑する精神干涉系の魔法だ、簡単に覚えられるが使用者の腕や対象の対魔法により効果は変わる魔法だ。効果は好意をだがせる事から絶対服従させる事が出来る。

そして今回はうまくいったようだ。

俺はとりあえずこれからどうすれば良いかを聞いた。
何でも制服を着て職員室に向かえと言う。

「じゃあアリスって子の部屋は知ったる？」

俺が質問するかどうか隣らしい。

「（合流しよう）」

俺はそう思いとりあえず行動した。

制服を着て部屋を出た、そして隣に行きドアをノックする。

「アリスー」

俺がそう言うとかチャと言う音と共に制服姿のアリスが出てきた。

「結果は」

「上々です」

アリスもうまくいったようだ。

「それじゃあ職員室に行こう」

「はい!!」

「「お供します」」

従者がいること忘れてた。

魔法学校：冷の朝（後書き）

今回は魔法を使わせてみました。大体は□の中にあるのが呪文です。

次回は二組を合流させたいと思います。

それでは次回で会いましょう。

魔法学校：職員室前で…（前書き）

今回は出来るだけコメディーにしました。

お楽しみ下さい。

魔法学校：職員室前で：

前回のあらすじ

冷とアリスは従者を洗脳した！！。

<職員室前>

（ヒート）

「おはようさん冷、アリス」

俺達二人は職員室のついた、そして俺は先にいた冷とアリスに朝の挨拶をする。

「おはよう二人共」

冷は爽やかにかえす。

「おはようございます」

アリスはお辞儀をしながら答え。

「おはようなのじゃ」

リリイもさつき酷い目に会ったとは思えないように普通に普通に挨拶をする。

「「おはようございます」」

そして謎のメイドと執事が最後に挨拶した。

………

「誰だ！！あんた達は！！」

「私は…」

「そんなこと聞いてるんじゃない何で一発キャラのお前達がいる！

！」

「予想外だよ！！」

「一発キャラのなのかこの二人！！」

「冷がつっこむが違うだろ！！正しいつっこみ処は！！」

「そして執事は一人で喋れーーーー！！！！」

「ここだ！！」

「「やっぱり面倒だから喋るな！！」

「いちいち口調まで考えるのは面倒だ！！」

「さっきからひでえ！！後作者の本音が混じってるし！！」

「それはそうだ！！」

「俺のモデルは作者だ！！作者の本音は俺の本音だ！！」

「自分をモデルのキャラを出すなんて作者いてー！！つーか自虐ネタ！！」

そして

「『俺はヤンデレ男子！！』

なのだ！！

「作者は病んでんのか！！」

「……………」

「その間は何だ！！その間は」

つーか！！

「リリイとアリスも喋れーーーー！！お前らメインキャラだろ！！」

「何で黙ってるだよ！！（ついて来れないだけです…作者）」

「まさかの飛び火！！そして作者説明あざっす！！」

「なん「余計にカオスなるからやっぱ喋るな！！」ひどいのじゃ！！」

「執事と同じ事をメインにもするのか!! けど少し喋れただけでもましか!!」

「そして職員室前で騒いでるのに何故誰もこねえー!!」

「それには激しく同意!!」

「ハア…ハア…ハア…」

少し休憩。

よし。

「いい加減しろー!!」

俺は職員室の扉を開くそこには…。

「誰も居ねえー!!」

何で居ないんだよ!!

「どうりで!!」

冷がありきたりな事を言ったのでテンションが下がった…ハア…。

「ため息すんなこんちくしょう!!」

何分後には来るかな…。

「無視か!! 無視なのか!!」

そう言えば天気とかあるのかこの島。

「もう疲れた…」

話が進まないので話しかけますか。

俺達はこちらに来るまでの道中を話し合った。

「やはり飲んでて正解だったろ、作戦もな」

俺は予想どおりに進んで良かった思う。

「俺達は何も無くて良かった良かった」

今の言葉でわかるように冷とアリスにはさっきの戦闘は伝えてない、冷に話すと面倒だから…。

「それにしても…」

俺はある所に目がいく。

「何で俺達とお前達は制服違うんだ？」

冷達はブレザーだけど俺は学ランリリィはセーラー服だ。

「何でだろうな？」

冷もわからないようだ。

「まあそこところは説明してくれるだろうな、調度来たぜ」
俺がそう言うのと足音が聞こえてきた。最後に。

「今後従者二人が出るのは不明です!!」

「出してやれよ!!」

魔法学校：職員室前で：（後書き）

今回はコントまがいの事をしました。面白ければさいあいです。

次回は魔法学校のメインの新キャラを出したいと思っています。

それでは次回で会いましょう。

魔法学校：先生（前書き）

今回は前半部分がどうでもいいことが書かれています、そこは飛ばして構いません。

それではお楽しみ下さい？

魔法学校…先生

前回のあらすじ

足軽暴走のために物語は進まずいまだに職員室前。暴走が終わると少して誰かが近づいて来た。

<職員室前>

（ヒート）

俺達はまだ職員室前にいる。

前回足音が聞こえてきたと言ったがそれは俺がただ単に耳が良かっために近づいて来る音と話し声が聞こえた為だ、結論から言うところ…。

「もう少ししたべってても良いわけだ」

「いきなり何を言い出す」

冷が白い目で見てるが気にしない、と言うか。

「作者もギター買っらしいぜ」

しかもエレキ。

「どーでも良い話題だなあおい、つかアコギの方が欲しいんじゃないの、お前に買わすくらいだし」

確かに…。

「本当は作者もアコギが欲しいんだけど手頃なやつが無いわけよ」
だからエレキ

「手頃なやつね…値段か？それとも見た目？」

「見た目。値段は2万五千円のやつを探してたようだけど、品質的

にはそれが良いらしいからな、だけど無くてなだけどエレキギターのやつで見た目も値段も良いやつがあったわけよたがらエレキを買おうと思ったんだけどまだ悩み中」

どれにしようほんとに。

「何で悩んでる？」

「作者がアコギの音が好きだから、だけど学校に軽音が有るんだけど知り合いにエレキしかやってなくてなアドバイスはエレキしか聞けんわけよ」

ほんとに悩む。

「要するにアコギが欲しいけど良いのが無いエレキは欲しい分けじゃないけど条件にあってるわけね」

「そのとうり」

「しかもその知り合いにはエレキ買うつて言ったらしいな」
そのとうりです。

「ならエレキ買えよ」
ですよねー。

「なんてどうでも良いこと話してたら来たぞ」
まあアコギもいずれは買うつもりだけどな。

「ほんとにどうでも良い」
心読むな心ー！！

「足音が聞こえて来ましたね」
とアリスが言うのと曲がり角を何者かが曲がった。
その人物は俺達に気付くと近くで止まる。

「「ハア…ハア…ハア…」」

その人物達は止まると深呼吸をしそして。

「「ようこそファネジア魔法学校へ」」

祝いの言葉をのべた。

<職員室>

その後俺達は職員室の中に案内された。

「どうもEクラスを担当するマリーです」

席につき最初に口を開いたのは俺とリリィの担任のマリー先生。

「Sクラスの担任のローズだ、よろしくたのむ」

次に冷とアリスの担任のローズ先生が挨拶する。

俺達は順番に挨拶した。

挨拶も終わり俺達はまだ時間があるため質問して良いと言うので質問している。

「何で俺達と冷達とは制服が違うんですか」

俺が質問すると何でも膨大な量の生徒をクラス別にわかりやすくするため違うらしい。

「基本的な勉強もするんですか」

次に冷が質問した。

何でも国語や英語などはしないらしい。

「武器はいつ使うのじゃ」

リリィは武器も出せるらしいしのうとアクセサリ型の魔法具を触れながな質問した。

答えは何でも迷宮と呼ばれる場所で使う機会があるそうだ。

「迷宮って何ですか？」

アリスが最後に質問する

何でも迷宮とは俺達がこの島で買い物などをするための金を稼ぐ場所らしい。

「そろそろ時間ですね、行きましょう二人共」

「行くぞ」

時間が来たために俺達はずいに教室に向かう。

冷とアリス達とは途中でわかれる。

そんじゃあ目立たないようにするか。

俺はそう決心しながら歩くのであった。

魔法学校..先生（後書き）

今回は新キャラ二名出しました。

出来るだけ出したいです。

次回は教室での出来事を書こうと思います。

二つに分けるかもしれません。

それでもよければ次回で会いましょう。

魔法学校：新しい教室・足軽達（前書き）

今回は自分なりに長めです。

それでも短いですが。

それではお楽しみ下さい。

魔法学校…新しい教室・足軽達

前回のあらすじ

まだ足音の人物達が来ないため足軽と冷は身内ネタの会話で暇を潰した。しばらくすると人物達が足軽達の目の前に現れる。職員室の中で話を聞くとどうやら担任達のような。そして最後に二組に別れて教室に向かった足軽達。

<教室前>

くヒートく

俺達二人は今Eクラスのドアの前で合図があるのを待っている。

マリー先生は先に入って生徒…俺達の同級生に転校生が来たのを説明している。

「それじゃ入って下さ〜い」

どうやら話が終わったようだ、先にリリイから入らす続いて俺も教室に入る。

回りは好奇心とリリイの美しさに見惚れる奴等だらけで俺には全くもって興味が無いようだ。

「それじゃ〜自己紹介してください」

今度もリリイから喋る。

「リリイ・フランベルジュじゃ、好きなものは食べ物全般じゃ、以後よろしくなのじゃ」

……

少しの静寂そして。

「「老婆言葉キターー!!」」

オタクじみた叫びがこの島全体に響きわたった。

「うう：それじゃ次は軽君」

マリー先生は耳を押さえながら俺に回す、正直やりにくい回りが「マリー先生かわええ！！」とか「リリイちゃんは絶対クーデレだつて！！」とか「いやツンデレに決まってる！！」とか議論し始めている。

「皆さん静かに！！」

マリー先生が注意すると回りは静かになった。どうやら荒れてはないうだ。そんじや言うか。

「足川 軽です、リリイの保護者です、リリイ共々よろしくお願いします」

最後にお辞儀をして終わると回りは「よろしくー」などフレンドリーな言葉をくれた。

「それじゃ空いてる席について下さい」

俺達は空いてる席：窓際の所に座る。

「転校生の二人もいることですし今日は1日自習にします、他のみんなはこの学校の授業がどんなのか教えて下さいね」

先生はここで質問を受け付けまゝすと言いつつ自分の席についた。

と同時にリリイに群がるこのクラスの9割の野郎ども、少ない女子もリリイの所に質問し始めた。

「まるでアイドルだな」

なんて俺が呟くと。

「まああんな美人だしね」

後ろから声をかけられた、俺は振り向き。

「改め足川 軽です。君は？」

後ろの席の女子に名前を聞く。

「国枝 くにえだ すみれ 堇すみれって言うんだ、よろしくね」

「よろしく」

俺達はお互いに握手をする。

「それにしても美人だねえリリイちゃんは」

「まあねえ」

「うちのクラスは美人が多いけどマリー先生とリリイちゃんには勝てないな」

余計な事を言えば怪我しかけないので俺は無言です。

「マリー先生可愛い系だよね〜ピンクの髪がチャーミングだし見た目も幼いから最初は年上とは思わなかったよ」

そう…と俺は答える。

「リリイちゃんは…」

国枝さんがリリイの容姿について言おうとした時。

決闘だー！！

と言う声で遮られる。そして回り…リリイに話しかけた奴等もさえも窓から外を見る。

「国枝さん決闘って何？」

俺はとりあえず国枝さんにこの騒動の理由だろう単語について聞く。

「文字どおりの意味だよ、一对一の勝負なんだけど怪我人は出ないから安心して」

「何で怪我人が出ないんです」

俺はまた質問する。

「原理はわからないけど魔法で出来た分身同士で戦うから本体には怪我はしないみたい」

成る程ね、それじゃ。

「勝負のメリットとデメリットってある」

「有るよ、相手の言うことを何でも一つ聞かないといけないらしい

よ」

私はしたこと無いからわからないけどねっと国枝さんは付け足す。

（そんな物好きは誰だ）

俺はそう思い外の校庭に目を向ける、そこには…。

「冷じゃねえか…」

我が親友がいた。

「知り合い？」

後ろの国枝さんが聞いて来た。

「同じ学校なんですけど何でまた決闘なんか」

しかも相手女子だし。

「あーバトルジャンキーの熊谷くまかい 乙女ちゃんか、おとめ気の毒だけど君の

知り合い負けたかな…」

「有名な人なんですか？」

「有名だよー強そうな人は片っ端から相手して未だ無敗。一年最強の女とまで言われる子よ」

そうですか：俺はそう言いもう一度どその熊谷と言う子を見る。

（あれで一年最強か…）

正直強いとは思えなかった。なんて考えていると。

（聞こえるか？足軽）

冷がテレパシーしてきた。

（聞こえるよ、要件は何だ？）

俺は顔に出さずに答える。

（どうすれば良いと思う）

（知るか）

正直どーでも良いけど。

（お前ならそう言うと思ったよ）

（どんな理由であれこうなったのはお前の責任だ、自分で考えろ）

（だよね）

一応アドバイスしとくか。

（相手はバトルジャンキーと言われるほどの戦闘狂だ、手加減は要らん一撃で決めろ）

俺がそう言うど闘いは始まった。

結果？

言うまでも無い。

冷の勝ちだ。

魔法学校：新しい教室・足軽達（後書き）

前回に引き続き新キャラ登場。

彼女は従者達とは違ってたくさん出して行くつもりです。

次回は冷サイドを書きます。

それではまた次回で会いましょう。

魔法学校：新しい教室・冷達（前書き）

今回は冷サイドです。

それではお楽しみ下さい。

魔法学校：新しい教室・冷達

前回のあらすじ

足軽とリリィはオタクじみたフレンドリーなクラスに転校した。

<教室前・冷サイド>

くクールく

俺達はローズ先生に教室前で待っている。と言われ呼ばれるのを待っている。

「それでは二人共入ってくれ」

俺達は新たな教室に入る。

「それでは自己紹介を頼む」

まずはアリスから自己紹介をする。

「アリス・E・スミスです、よろしくお願いします」

アリスはそう言うとお辞儀をする。

続いて俺は自己紹介をする。

「佐藤 冷です、以後よろしくお願いします」

俺もお辞儀をして回りを確認する。

俺達の新しいクラスメイトは9割が品定めするかのような視線を俺に向ける、ここまでは予想出来た。しかし残り1割が問題だ。

何で身内と元クラスメイトの五人が居るんだ！！

脳内で叫んでいると「空いてる席についてくれ」とローズ先生に言われ俺達は空いてる席：ほばいや完璧にしむかれたであろう、窓際の席に座る。

「今回は転入生もいることだ、自習にする。各自ちゃんと勉強するように」

ローズ先生はそう言うと言葉から出ていった。

と同時に回りは騒ぎ始めた。

そしてアリスに話しかける野郎ども。

そして俺の方にはある人達が囲む。とりあえず聞くか…。

「何で皆いるの、特に真美姉とカレンは年違うでしょ…」

俺の回りにはいつものメンバーがいた。

「とりあえず説明してくれ、後代表者決めてね」

と言うとあらかじめ決めていたのか真美姉が説明し始めた。

<説明中>

話をまとめると五人は俺達が検査を受ける前に合格していて魔法学校に通っていたらしい、なぜ教えてくれなかったのかは教えてくれなかったが…。

詳しく聞こうとしたが蜘蛛の子を散らすかのように五人は逃げてしまった。

後で調べる事が増えたなと思っていると…。

「おい!! お前!!」

不意に声をかけられた、厄介ごとの臭いがする。だけど…。

「何ですか？」

無視する訳にもいかない。俺は声のする方向にいる人物に返事をする。

「お前が炎夏の言ってた冷って男か」

「多分当たってるけど君は？」

俺は話しかけて来た人物…女の子の名前を聞く。

「私か、私の名前は熊谷 くまかい 乙女 おとめ だ」

彼女…熊谷はそう言うと言って物騒な事を言ってきた。

「佐藤 冷私と戦え」

「……………はあ、何で？」

意味がわからん。

「私が唯一^{ライバル}好敵手と認めた炎夏が言ってたんだ、「お前より冷の方が強い」ってな、だから戦え!!」

「嫌です」

俺はキッパリと拒否る。しかし彼女は笑っている。

「残念だけどお前に拒否権はねえよ」

俺が？マークを浮かべていると彼女は：

「私はこいつに私の全てをかけて決闘を申し込む!!」
何かを宣言した。

<校庭>

あの後決闘の意味を教えてもらった。決闘は拒否権はあるけど相手が全てをかける場合は断れ無いらしい。しかし自分は負けても一つだけ言うとききくだけで良いらしい。メリットが多いが面倒だ。

(とりあえず足軽に聞くか…)

俺は窓から見てる足軽にテレパシーを送る。知るかっって言いそうだけれど。

(聞こえるか？足軽)

俺は聞こえるか確認する

(聞こえるよ、要件は何だ？)

(どうすれば良いと思う？)

(知るか)

やっぱり言った。

(お前ならそう言うと思ったよ)

予想どうりだよ。

(どんな理由であれこうなったのはお前の責任だ、自分で考えろ)

（だよね）

俺が落ち込んでいると足軽は続けて言った。

（相手はバトルジャンキーと言われるほどの戦闘狂だ手加減は要らん一撃で決めろ）

足軽がそう言うのと闘いの合図になる

（ちなみにテレパシー使ってる間に分身を作っていました。作者）

熊谷ちゃんか移動しようと動き始めるが俺はすでに後ろにいる。

俺は後ろ首に手刀をいれ倒れる熊谷ちゃんを受け止める。

回りは何が起こったのかわからないようだが気にしない。

俺は熊谷ちゃんをお姫様抱っこして保健室に向かった。

この出来心が後に嵐になる事を俺はまだ気付かなかった。

魔法学校：新しい教室・冷達（後書き）

今回は冷達のクラスを書きました。

冷サイドは女性率高めで行きたいと思います。

次回はどうか未定です。

それでもよければ次回で会いましょう。

ク「ご主人様って呼ぶな!!」 (前書き)

今回は冷サイドです。

ク「ご主人様って呼ぶな!!」

前回のあらすじ

? 冷の身内がいた。

? 熊谷 乙女に勝利した。

? 保健室に連れ込んだ。

||...

<保健室>

くクールく

俺は今物凄く面倒な問題に直面している。具合的に言うと:

「ご主人様く」

熊谷ちゃんかこんな事を言い始めたからである。

なぜこんな事になったかと言うと数分前にさかのぼる。

<数分前の保健室>

「失礼します」

俺は行儀が悪いが足で扉を開く。

「誰か居ませんかく」

返事は無い。

(とりあえずベットに寝かすか)

俺は熊谷ちゃんを起こさないように静かにベットの上に降ろす。

さてと教室に戻ろうとしたら。

「待って下さい」

呼び止められた。ここまでは良い次の言葉は：

「ご主人様」

意味がわからん。

<保健室>

（と言う事があったんだけど…）

俺はテレパシーで足軽に伝える。

（とりあえず何でも相談する癖直そうか。まあぼちぼち調べるよ、お前はお前で話を聞け。そんじゃあ切るぜ）

と足軽がいうとテレパシーが切れた。

（あの野郎他人事だと思って…て他人事かあいつからしたら）

俺はとりあえず何でもご主人様と呼ぶのか聞くことにした。

「熊谷「乙女って読んで下さい」乙女ちゃ「名前だけで呼んで下さい」乙女何で俺の事をご主人様って呼ぶわけ？」

彼女はえへへと笑いながらこう答えた。

「私の家系は代々自分より強い人の使用人になるのがしきたり何です。だから私を倒したご主人様に尽くすんです！！」

彼女はそう言うのと隣のベットに座っていた俺に押し倒して来た。

俺はこんな事をされるとは思わず反応できなかった。

彼女は俺の上に乗りながら言う。

「ご主人様も大胆です！誰も居ない保健室に連れ込むなんて」

こ、恐い！！

「俺はただ君を休ませよう」と

そんな気は微塵も無い！！と言えない俺は遠回しにそんな気が無いことを言う。

「関係無いです！私の家系では押し倒せるならどんな場所でも押し倒せて有るんですから」

そんな家系は嫌だ！！

なんて考えていると彼女は服を脱ぎ…

ガラガラ

「邪魔するぜ………すまん続けて」

扉をあけて足軽が現れたしかし扉をまた閉めて…

「みんなー聞いてくれー特にアリスー………!!!」

すごい勢いで走り出した

「止めろー!!」

俺はすぐに追いかける。

保健室に残された乙女は何があったのかわからず一言。

「ご、ご主人様…」

<学校の物影>

「本当にありがとう!!」

俺は今足軽にお礼を言っている。何故お礼を言っているかと言うと実はアルカディアの居たときにも同じ事が有りその時も足軽が同じ事をして助けてくれた事があったのである。

「次は気をつけろよお前は全自動女殺しなんだから」

「えっ?」

「はあ…わかって無いならいいよ」

なぜか足軽は呆れながら答えた。

「そんじゃ俺は教室に戻るはリリィが心配だし」

そう言う足軽は歩き始めた。

「少しいいか足軽!!」

俺は足軽を呼び止め聞く。

「俺の身内がこの学校にいる「何でも俺に聞くな自分で調べな」待

ってくれ!!」

足軽は俺の呼び止めを聞かず去ってしまった。

「これについては自分で調べろって事か…」

俺はそう結論づけ教室に戻る。

その時はすでに嵐になっていたとも知らずに…

ク「ご主人様って呼ぶな!!」 (後書き)

今回は急いで書いたために質と量ともに低めなっていました。
すいません。

次回は教室で嵐を起こせるつもりです。

それでは次回で会いましょう。

魔法学校：追いかけてまわさる（前書き）

今回はギャグに見せかけシリアスです。

それでも良ければお楽しみ下さい。

魔法学校：追いかけてまわさる

前回のあらすじ

冷が襲われかけた。

足軽のおかげで事なきをえたが……

<廊下>

くクールく

「うわあああああ！……！」

俺は今現在追われている。

「おい！！そっち行ったぞ！！！」

「殺せ！！殺せ！！！」

「よくも乙女さんをー！！！」

ほとんどの一学年の生徒に：何故俺が追われているかと言うと数分前の教室にさかのぼる。

<数分前の教室>

俺は教室に戻るといきなり。

「――【我憎むべき物に業火を】――」

中級魔法を放たれた。

「うお！！！」

内心何言ってるだかと思ひながら冷静に避ける。

俺は演技をしながらいきなり魔法攻撃してきたやつらに怒鳴る。

「いきなり何するんですか!!」

俺がそう言うのと魔法攻撃をしてきた奴等は言う。

「何故かって？自分の胸で考えろ!!」

そう言うともた同じ魔法を使ってきた、今度はさらに倍の数がきたって。

「何でだよ!!」

俺はギリギリの所で避ける、まだ余裕は有るが三倍ぐらいに増えたらさすがにヤバイ。

俺がそう思っていると…。

「くそ!!やはり乙女ちゃんを倒した男だ、一学年の同志を呼べ」
俺はそれを聞くと走り出していた。

<廊下>

と現在にいたる訳です。

回想中に何とか撒けましたけどいつみつかるかかわからず俺は使われていない部屋で途方にくれていた。

「どうすれば良いんだ…」

俺は床に座りこの状況をどう打破するか考える。

「全くわからん」

これがテスト問題なら簡単なのに。と頭を抱えながら考える。

こんな人間関係の問題の時はいつも足軽が助けてくれたけど…例えばあの…と…き。

【ピースが現れました】

一人の無力な勇者^{ヒーロー}

以上

「があああああ!!!!」

不意にピース現れ体に激痛が走る。

それは記憶だけではなく体に刻まれた傷さえも現れる。

「はあ…はあ…はあ…」

気付いたら痛みは引き俺はアルカディアの消えてた記憶を振り返っていた。

「何で…忘れてたんだ…」

俺は多分泣いているだろうそれほど俺は…

「無力だ…」

足音が聞こえるたくさんの音だ。まるであの時のように…。

「彼女ならなんて言っただろう」

きつと…

俺は扉を開け彼女と同じ事を言う。

「群がる敵は倒すのみ!!」

俺はあの時より少なく弱いもの達に牙を向ける。

今はあいつのお荷物ではない事を証明するために。

くヒートく

俺は今冷の場所に向かっている。

どうやら一学年の生徒にケンカを売られて逃げ惑っていたようだ。

普通なら俺は関わらないようにするんだが何故か普段のあいつなら戦わないはずなのに今は何故か戦っている。

その証拠に俺の歩いている場所には死んではないが怪我人が何人かいる。

しかも進めば進むほど数はますますばかりだ。

「戦闘音が聞こえてきたな…」

どうやら目的地はもうすぐのようだ。

俺は歩くのを止め走り出した、何故あいつが自分から戦っているのかをいち早く確かめるために。

「よく冷」

俺が着いた時には冷は最後の一人を気絶させた所だった。

「……………」

冷は俺に気付くと何故言ったのかわからんが一言。

「ゴメン」

と言った。

魔法学校：追いかけてまわさる（後書き）

今回は久しぶりにピースを出しました、このピースは結構重要なやつなので次回はこれを中心に話を書きたいと思います。

それでは次回で会いましょう。

無力な勇者（ヒーロー）（前書き）

今回もシリアスです。

それでも良ければお楽しみ下さい。

無力な勇者（ヒーロー）

前回のあらすじ

何故か一学年の男子に襲われる。

そして普段の冷ならしない行動を冷はとる。

<空き教室内>

（ヒート）

「いきなり何謝ってるだよ、意味がわからん」

屍をたくさんつくりあげた冷は俺を見るなり変な事を言ってきた。

「わからない…だけど…謝らなければいけない気がしたんだ…お前に…一生をかけて」

何それ。

「重いわ」

俺がそう言うともまた同じ事を冷は言う。

「ゴメン」

「……………」

意味がわからん。

俺は今さらになって『今』の冷を確認する。

今の冷はいつものラブコメの主人公な感じではなくどっちかと言うと友の悲劇を止められなかった一人の男って雰囲気だ。

どこか落ち着いていてどこか悲しげな表情。

見た目も体のあちこちに古傷ができている。何故だ？

「その古傷みたいなのやつはどうした。お前ほどの男がこんな雑魚に傷をおうとは思えん」

悟られないように俺は聞く、せめて謝った理由のヒントが欲しい…。
「これか？これはアルカディアでうけた傷だよ」

「はぁ？」

今なんて言った。アルカディアでうけた傷だと。

「何故今になって傷が戻ってる」

俺はつい聞かなければいいことを言ったしまう。

「それは秘密だ」

冷は冷静に答える。

「何故秘密にする」

いつもの冷ならひみつなんて親友同士無しだっという奴なのに。何故？

「お前には思い出して欲しくないんだ…」

思い出す…成る程。

「冷：ピースが現れたなしかも結構重要な破片が」^{ピース}

俺がそう思い冷に聞くと冷は…

「そうだ…俺がどれ程無力な勇者だったのか思い出したよ」^{ヒーロー}

冷はそう言うのと去ってしまった。

<足輕の部屋>

あの後授業は中断（自習なのだが）され最初に目覚めた部屋に戻り俺は自分のベットの上で考えていた。

「無力な勇者ねえ」^{ヒーロー}

俺は最後に冷が残した言葉が気になっていた、ほぼ確実にこれがピースだろうと思うのだが俺には反応しない。どうやら冷だけのピースのようだ、その証拠にリリィにこの言葉を言ってもピースは現れなかった…アリスには試して無い為確実にそうとは言えないが。

「古傷も思い出されるほどの記憶^{ピース}とはなんじゃろう」

「久しぶりの登場だなあ」

何話出てなかったつけ。

「それは言うな!!」

「良いじゃん魔法学校に入ってまだ1日なのにシリアスだぜ、ヤル気無くすわ」

「メタ発言は止めるのじゃ!!」

「わかった」

俺はリリィにそう言うのと今回のピースについてわかった事をまとめる。

？個人だけの物がある。

？人格に及ぼす物もある。

？記憶だけではなく体にも現れる。

「こん位かなあ」

俺はわかった事をリリィにも伝える。

「やはり冷に直接聞いたほうがいいのじゃ」

リリィはそう提案してきたが：

「それで進めばどんなに楽か！」

俺はさっきから冷を探知系の魔法で探している事を伝える。見つかって無いことも…。しかもアリスの行方もわからず仕舞いな事も。

「正直八方塞がりだよ」

俺がそう言うのとリリィは何故？と聞いてきた。

「わかんないアリスが消えたのも今の冷が味方なのかも…」

そしてあいつが自分は無力な勇者ヒーローと言ったピースが現れたのかも…。

「ほんと俺達二人はアルカディアで何してたのかも
わからない。」

無力な勇者（ヒーロー）（後書き）

今回は冷とアリスが一時的に物語から外れます。

魔法学校が終わるまでには復帰させるつもりです。

最後に今後シリアスパートが続くと思います、それでも良ければ次回で会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2313s/>

ヒート&クール

2011年12月2日21時52分発行